

石川県小松市符津町方言の自然談話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000112

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



石川県小松市符津町方言の自然談話

加藤 和夫

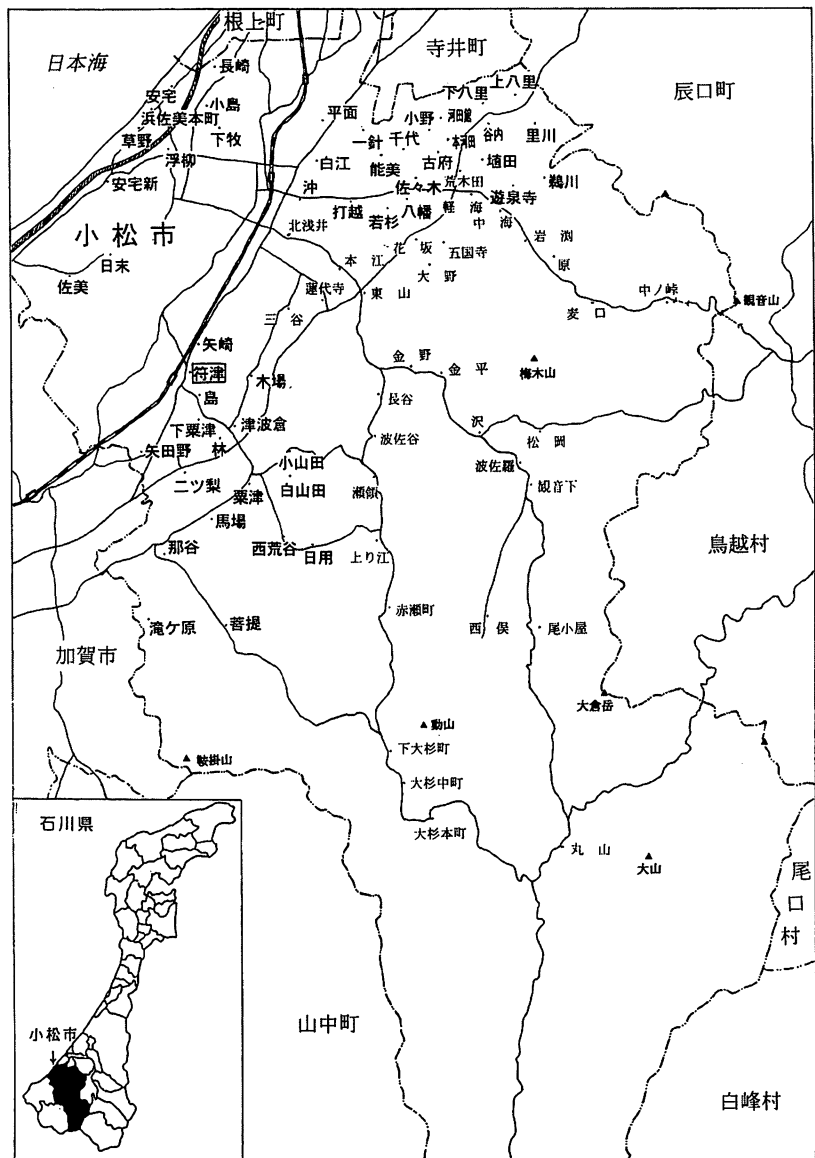
はじめに

本稿は、筆者が小松市立博物館方言調査委員会の委託を受け、1996（平成8）年度より5ヶ年計画で進めている小松市全域を対象とした方言調査の中間報告として、1998年度調査の重点調査地点とした小松市^{ふっまち}符津町の生え抜きの高年層話者4名（男女各2名）の自然談話を文字化し、あわせてその共通語訳を付したものである。符津町は、小松市の西南部、J R北陸線粟津駅前^{（粟津駅）}に位置する。符津町の地理的位置については、右下に付した「調査地域図」で確認されたい。なお、本調査の概要や小松市全体の地理的概要等については、昨年までに本紀要に掲載した拙稿（1997）（1998）（1999）などを参照されたい。

符津町の自然談話の収録は、1998年8月2日の午後、生活語彙調査と平行して調査会場の一室にて行った。符津町調査の話者の方々のまとめ役でもあった村上保健氏を中心に、北西雪、中西甚五郎、中野豊子の3氏を加えた4名の会話は、きわめて自然な調子で順調に進み、計40分程度の録音資料を得ることができた。全体を通して、小松市南部地区の方言の特徴がよく現れた談話を記録できたと考えている。本稿では、そのうちの約32分30秒を文字化した。

なお、文字化資料の草稿作成にあたっては、調査参加者のうちの小西敦、高井慎一、山田恵子（いずれも当時金沢学院大学文学部日本文学科3年生）、さらに小川有美（当時金沢学院大学文学部日本文学科3年生）の協力を得た。記して感謝する。

調査地域図



《凡例》

- (1) 方言談話の文字化にあたっては、出来る限り実際の音声に近づけた表音的片仮名表記とし、その下に漢字仮名交じりで共通語訳を付した。原則として文節分かち書き（談話の連続性から例外的な部分もある）とし、アクセントは省略した。なお、北陸方言に特有の、文節末や文末の音節が長音化して揺れるイントネーション（「間投イントネーション」「ゆすりイントネーション」などと言われる）が聞かれる部分には「～」を付して示した。
- (2) 文字化した自然談話は、その中心的話題によって便宜的に四つの部分に分け、話題の分かれ目に「話題1 昔の学校生活」「話題2 時代の変化」「話題3 戦時中の話」「話題4 子どもの頃の遊び」のように小見出しを付け、さらにそれぞれの小見出しの後に、その部分の録音時間を（ ）に入れて示した。
- (3) それぞれの会話の冒頭に話者を示す略号を付した。略号と各話者の対応は後に示すとおりである。なお、話者の略号（A～D）は話題1の冒頭部分における登場順に割り当てた。
- (4) 表音的片仮名表記のうち、ガ行音については、当該方言では原則として語頭が破裂音、語中・語尾が鼻濁音となるので、破裂音はガ・ギ・グ・ゲ・ゴ、鼻濁音はカ°・キ°・ク°・ケ°・コ°と区別して表記した。また、談話中短く添えられる音は下付きの小さな片仮名で表記した。一方、小松市の高年齢話者に時折現れる文節末や文末で音の卓立とともに挿入されるンは、上付きの小さな片仮名で示した。
- (5) 録音内容が聞き取りにくい箇所や、内容不明の箇所には片仮名表記の下に波線~~~~~を付した。
- (6) 複数の話者の声が重なっている箇所は、その部分に下線_____を付した。
- (7) 言いよどみの箇所には片仮名表記に網掛けを付した。
- (8) ある話者の話に別の話者が短く相づちを打ったり、口を挟んだりしている箇所は、片仮名表記と共通語訳の両方に、その話者の略号を上付きで付し（^B）のように括弧付で示した。
- (9) その他必要と思われる箇所には、片仮名表記の上に小さく適宜注番号を(注1)のように付し、四つの話題各々の末尾に注記した。

<話し手>

- A 村上保健 氏 男 大正11年 符津町生まれ
B 中野豊子 氏 女 大正4年 符津町生まれ
C 中西甚五郎氏 男 大正8年 符津町生まれ
D 北西 雪 氏 女 大正11年 符津町生まれ

<調査・談話収録担当>

- K 加藤 和夫 男 昭和29年 福井県武生市^{たけふ}生まれ

話題1 昔の学校生活（約8分30秒）

- A アノー ナカノサンニ チョッコ オハナシモ キキタイト オモウンダケレドモ アノー
あのう 中野さんに 少し お話も 聞きたいと 思うのだけれども あのう

ムカシワー アノー チーサイ トキワ ガッコエ ナンカ コドモオ ツレテ アノ キョ
昔は あのう 小さい 時は 学校へ 何か 子どもを 連れて あのう 教

ーイクニ イッタツチューヨナ コトオ キーテオリマスカ° (B ウーン) ドンナフーニ
育(勉強)に行ったというような ことを 聞いておりますが (B うん) どんなふうに

(注1) (注2)
シタ コドモデモ オーテイッタンカ テーデモ ヒッパッテ ツレニイッタモンカ ドーユー
した 子どもでも おんぶして行ったのか 手でも引っ張って 連れに行ったものか どういう

コトン ナッタモンカ チョッコ キカITEホシート オモウンヤケド。
ことに なっていたものか 少し 聞かせて欲しいと 思うのだけれど。

B アノー ワタシラ コドモ チューテイッタ コトワ ナイケド~ (A オー アー ソーカ)
あのう 私は 子ども(を)連れて行った ことは ないけれど (A ああ ああ そうか)

(注3)
マー アノ アレヤワ アノ イヌイノ~ (A ン) カーチャンナ イヌイノ アノ オモ
まあ あの あれだよ あの イヌイの (A うん) 母ちゃんは イヌイの あの 本家

(注4) (注5)
ヤノ カーチャンネ アイクラノ (A ウン) アノコァー アノー ウー イマノー アノ
の 母ちゃんに アイクラの (A うん) あの子は あのう 今の あの

ー アノコ アン トーチャンヤ アノー アノコァ ナン... (C カズオ) カズオカ。
う あの子 父さんや あのう あの子は (C カズオ) カズオか。

(注6)
アノコ ツレテ~ ガッコエ ロク ロクネンノ トキヤッタカシナ ア マ アノー ツレテ
あの子(を)連れて 学校へ 6年生の 時だったかな ま あのう 連れて

(注7)
~ キター ホーシトー コドモヤサケ ヤッパ サワク°ヤロー。 ソシルトー アノ ソト
来て そうすると 子どもだから やはり 騒ぐだろう。 そうすると あの 外に

デター ナンシテクレツチューテ イワレター アノー ツレテッテ ロクニ ベンキョ デキナ
出て 何してくれと言って 言われて あのう 連れて行ってろくに 勉強 できな

(注8)
ンダッテ アノコァ アイコーカ° ソンナコトオ アノー ワタシラニ ハナシシトツタカ°
かったってあの子が アイコが そんなことを あのう 私たちに 話していたが

(A アー ソーカ ソーカ) ツレテキトツタ。 オー ソー ソレイカ°イ ツレテキテヤッ
(A ああ そうか そうか) 連れて来ていた。 うん そう それ以外(に) 連れて来ていた

ター アノ シェート オラナンダケド。 ソノ オー ワタシラノ シェキデ。
あのう 生徒(は)いなかったけれど。 その うん 私たちの クラス (学年) で。

C ワシャ ワシャー チツチュートキニ アネニ ^(注9) ツンダツテッタチューコトヤ (B ア ソー
私は 小さい時に 姉に 連れられて行ったということだ (B あ そう

カ) (A アー ソーカ) ^(注10) タツン バー ユータ。 (B アー ソーカ) ^(注11) ウン。 オメー
か) (A ああ そうか) タツの お婆さんが言った。(B ああ そうか) うん。 お前(を)

^(注12) ツレテッテワ~ ヤカマシトワ~ シェンシェアー ローカ デトレツチュテ ユワレタデッテ。
連れて行っては うるさいと 先生は 廊下に出ていると言って 言われたからと言って。

B ソヤ ソヤ。 ^(注13) (C ン) ソンカ°ヤ イヌイノ アノコモ ヤッパ ソーヤッタ。 アノコ
そうだそうだ。 (C うん) そうだよ イヌイの あの子も やはり そうだった。 あの子

^(注14) ワカ° ホンニンカ° ソーユートッタモ。 (A アー ソーカ) ウン ウン。 ソンナトキモ
自分が 本人が そう言っていたもの。 (A ああ そうか) うん うん。 そんな時も

アッタ。
あった。

A ホンデ ワシラモ キータ ハナシヤケドモ オイ エー ^(注15) ワシントコァ ヤエンザツチュー
それで 私も 聞いた 話だけれども おい 私の家は ヤエンザという

ウッチャケドモ (B ン ンー) ヤエンザノ オヤジャ ナンデー ネンネ ツレテ コンダ
家だけれども (B うん うん) ヤエンザの 親父は なぜ 赤ん坊(を)連れて来な

^(注16) カ°ジャ。 キョァ モリシルコト エラナンダンカト (B ン フン) コーユーフーニ ソノ
かったんだ。今日は子守りをすること(が)必要なかったのかと (B うん) こういうふうに その

ガッコノ シェンシェーカラ イワレタト (B ン) ユーヨナ ハナシオ チラット キータ
学校の 先生から 言われたこと (B うん) というような話を ちょっと 聞いた

モンデー ンナ ガッコノ キョーイクノ バエ ソンナ コドモ ツレテイッテモ エカッ
もので ねえ 学校の 教育の 場へ そんな 子ども(を)連れて行ってもよかつ

タカ°カ コドモ オーテッテモ エカッタカ°カナート コーユークト オモタモンデ。
たのか 子ども(を)おんぶして行ってもよかったのかなあと こういうこと(を)思ったので。

D ソラ ヤッパ ムカシヤ^ンナー。
それは やはり 昔だよねえ。

C ムカシヤ。
昔だ。

A ホンデ イマー ホンノ ムカシノ イマ ハナシオ シトルカ^デ。
それで 今 ほんの 昔の 今 話を しているの。

D ウララ ヤッパ ソンナコトモ キキモセンシ (A アー ソーカ) ミモ^センシ。
私は やはり そんなことも 聞きもしないし (A ああ そうか) 見もしないし。

(注17)

C オメーラ ウチャ エーサケ ソンナコト シェンデモ (笑) エランダシ ダレモ サシエ
あなたは 家が いいから そんなこと しなくても いらなかったし 誰も させ

ンダカ^ヤ。 モリベ^ァ オッタサケ。 (B オー オー) ホヤ^ロ。 (D ノー ー)
なかったんだ。子守をする人がいたから。 (B そう そう) そうだろう。 (D ねえ うん)

(注18)

(注19)

(注20)

ウラントカラー イッショケンメーネ タンボ シェンナンサケ ガッコ ゴロクネンニ ナル
私の家など 一所懸命に 田んぼ(を)しなくてはならないから学校(の)5・6年生になる

ト マニオーモンヤサケニ オー (D ソヤ ソヤ) ネンネ ツレテ ガッコ イケト。
と 役に立つものだから うん (D そう そう) 赤ん坊(を)連れて 学校に 行けと。

A オー ナンカ オー ナンカ ソンナコトラシカッタワネー。
ああ 何か ああ 何か そんなことらしかったよねえ。

B シン ソーヤ。
うん うん そうだ。

C オッカ オッカ オッカ イソカ^シテ キョ^ァ タンボ イカンナンサケ。 オー。 ナマエ
母さん 忙しくて 今日は 田んぼ行かなくてはいけないから。うん。名前

ユーテー。
言って。

B ワテーラ マ オカケ^サマデー ヤッパ ウチカ^デ アーユーノ デンキノ シコ^ト シトル
私など ま お蔭様で やはり 家が ああいうの 電気の 仕事(を)している

カ°デ ヤッパシ ケッコーヤツタ。(D シン) ウン キヤー エンソクジャツチュート
ので やはり よかった。(D うん うん) うん 今日は 遠足だと言うと

チャーント アノ カコ°カキ キテナ モノイレテー ナ オボタイ モノァ ココ イレ
ちゃんと あの 籠かき(が)来てね 物を入れて みんな 重たい ものは ここ(に)入れ

(注21)

ヤユーテ イワシタ (D オー オー ア) イワシタ (D オー ソー ソー) アノ
なさいと言っておっしゃった (D ああ ああ) おっしゃった (D あの そう そう) あの

(注22)

カコ° カコ°カキデモ ヤッパ オヤ チョット ヤツタワイヤ シン ウラントコン キヤー
籠かきでも やはり親(が)ちょっと(お金を)やっていたよ うん 私の所が 今日

イクサケ タノムツテユーテ。 ホンナモン ナンヤラ ヤツタツタ。 デケ°ーロー。 ア
行くから 頼むと言って。 そんなもの 何かを やっていた。 なぜだろう。 歩

(注23)

(注24)

ルクト ヒドネーケリヤ コノ カコ°エ ノレット ユワツシャルカ°カ アルキトナイトキヤ
くと つらければ この 籠に 乗れって おっしゃるのか 歩きたくない時は

コノ カコ° (A・B 笑) ノシテモローカナート コーユコト オモトツタ。(D ウン ウン)
この 籠(に) (A・B 笑) 乗せてもらおうかなとこういうこと(を)思っていた。(D うん うん)

ソレダケニ オヤカ° ヤッパリノー アノー シテー。 シー。
それだけに 親が やはりね あのう して。 うん。

D オン オン。 ココロ ツケテ (B オー ソヤ ソヤ シー) ソー ソー ココロツケテ
うん うん。 気に かけて (B ああ そう そう うん) そう そう 気にかけて

オマエー イクサカイニト オモテ (B ソー ジャツテ ン) ウン。
お前(が) 行くからと 思って (B そうだって うん) うん。

ケッコーヤツタヤサカイニナ。
幸せなことだったからね。

B ホンデ〜 エンソクネ〜 イツタカッテ〜 ヤッパシ〜 アノー ワリヤー キャラメル モツ
それで 遠足に 行っても やはり あのう お前は キャラメル(を)持

テキタデ モリナカ°ノ (D シン) アノ ハタ コーシトレーッテ。(A・B・C・D 笑)
って来たから 森永の (D うん) あの 旗(を)こうしていろと言って。(A・B・C・D 笑)

ハタ コーシトレーツテ アノ ミルクノ。

旗(を) こうしていろって あの ミルク(味)の。

C モリナカノ ミルクキャラメル。

森永の ミルクキャラメル。

B ミルクキャラメル モツテキタ ユーテワシノー (D オー ソーヤ ソーヤ オー)

ミルクキャラメル(を)持って来たと言ってはね (D ああ そうだ そうだ うん)

ヤッパ イワレタ。 ソー オモート～ アー ワカ^oメァ ケッコーナシノー アノー ミヤッ
やはり 言われた。 そう 思うと ああ 自分は 結構な あのう 身の上

タカ^oヤナート コー オモテシノー。

だったなあと こう 思っているの。

D シー ホントヤノー。

うん 本当だねえ。

B ウーン。 (D シー)

うん。 (D うん)

C カワラシ カオシテー ヒク^oラシシトツタカ^oヤ。 (B・D 笑)

可愛らしい顔(を)して 暮らしていたんだ。 (B・D 笑)

B ダイブ オヤノ オカケ^oジャ (C エー) オヤノ オカケ^oヤト オモテ^u (D ソーヤ)

大分 親の お蔭だ (C えっ) 親の お蔭だと 思っ^uて (D そうだ)

イマ マン ヨロコンドル。 (D オーン) ウーン。

今 まあ 喜んでいる。 (D うん) うん。

A ソーデスネー マー ワシラノ ジブンデモ ガッコーチュート マー ジンジョーロクネンシ

そうですねえ まあ 私たちの 頃でも 学校と言うと まあ 尋常6年生

エー (B ウン) ソレカラ コートーチュート オンナノ ヒトァ モー ジェンジェン

(B うん) それから 高等(小学校)と言うと 女の 人は もう 全然

(注25)

イカナンダモンヤ (B ソーヤ) アワズノホーデア アノ オンセン ア オンセンノ

行かなかったものだ (B そうだ) 粟津の方では あの 温泉 温泉の

(B ン) アワズジンジョーコートーショーカ°ッコーチュートコロエワ オンナワ イクモン
(B うん) 栗津尋常高等小学校というところへは 女は 行くもの

デナイトユーヨーナ (B ン ソーヤ) カンカ°エカタヤッタンヤ。
でないというような (B うん そう) 考えだったんだ。

B アノ オンナノコデ ガッコ コートガッコ デル コワ カンコ°フサン シルカ (A ソー
あの 女の子で 学校 高等(小)学校 出る 子は 看護婦さん(を) するか (A そう
ソー ソー) シネ ソーユー コーラカ° アノ コートガッコ デル。(A ソーデス) ソレ
そう そう) ね そういう 子たちが あの 高等(小)学校(を)出る。(A そうです) それ

カラ マタ ソレイジョン ナルト マタ アノー コマツノ コートージョカ°ッコエ
から また それ以上に なる と また あのう 小松の 高等女学校へ

デレタワ^ンネ。
出たよね。

A ダカラ コートージョカ°ッコートカ コー エ アノー アノ ショーキ°ョートカ イロン
だから 高等女学校とか あのう あの 商業(学校)とか 色んな

ナ ソーユー チューカ°クエ イケルツチューノワ ガッコーノ センセーノ コドモカ
そういう 中学校へ 行けるというのは 学校の 先生の 子どもか

(注26)

(B ン) ビョーインノ エンチャーシェンセノ コドモカ (B ン コドモカ) ソーユ
(B うん) 病院の 院長先生の 子供か (B うん 子どもか) そうい

ーナ ヒトンネーケリヤ イクモンジャナイト オモトツタ。
うような 人でなければ 行くものではないと 思っていた。

D ソー ソーヤ。
そう そうだ。

B ソーヤ ソーヤ。
そうだ そうだ。

C イク ヒツヨーア ナカッタカ°ヤ。
行く 必要が なかったんだ。

A カトーセンセーノヨーナ コンナ アノ ドッカノ チャントシタ オボツチャンカ モー
加藤先生のような こんな あの どこかの ちゃんとした お坊ちゃんか もう

ユーフクナ ジドーシャデモ モツテオルヨーナ ウチデナケリヤ ソーユトコエ イケルモン
裕福な 自動車でも 持っているような 家でなければ そういう所に 行けるもの

ジャト オモワナンダンヤ。(C ホヤー) (B ホントヤ。 ソーヤ ソーヤ) アルテード
だと 思わなかったんだ。(C そう) (B 本当だ。 そうだ そうだ) ある程度

(注27)

アタマカ アツテモ (B ソーヤ ソーヤ ソーヤ ソーヤ) ソーユ^{コト}ナンヤ。
頭が 良くても (B そう そう そう そう) そういうことなんだ。

B ン。 ソーヤ。 ンー。(A ホンデー) トチャンラ アタマ アツテモ ソンナ
うん うん。そうだ。うん。(A それで) 父ちゃんなど 頭(が) よくても そんな

ガッコエ ウエノ ガッコエ イクヨーニ オモテナンダンヤ(笑)。
学校へ 上の 学校へ 行くように 思っていなかったんだ。

A ンナ ンナ イカナンダンヤ。
みんな 行かなかったんだ。

C ガッコーデ…。
学校で…。

D コートーデ ダイタインネ。
高等(小学校)までで だいたいね。

C ガッコー イクノカ° タンボ イットツタホーカ° オモシカツタンヤ。(B 笑)
学校(へ) 行くのが 田んぼ(へ)行っていた方が 面白かったんだ。(B 笑)

A ダイタイ アンタ フツーノ チョットシタ イマーワ アノ ホンナコト イワンケドモ
だいたい あなた 普通の ちょっとした 今は あの そんなこと言わないけれど

ムカシワ アンタ チョットシタコトク°ライデア アッコネア ホンナ チューカ°ク イツタ
昔は あなた ちょっとしたこと位では あそこ(の家)には そんな 中学(に)行った

(注28)

リ ナンジャイ ベンコナ ンリヤ ナンジャイット コンナ ハナシ。
りして 何だ 生意気な あれは なんだと こんな 話。

C マー ソンナヨナモンデア。
まあ そのようなものだ。

A ネー。
ねえ。

B ソーヤ。(C ン)
そうだ。(C うん)

A ソイカラ マ コノ テレビナンカモ ドンドン デタトキナンカモ イヤー マツテクダサイ
それから ま この テレビなども どんどん 出た時なども いや 待って下さい

(注29)

ナカノーサンノ トコロカ° テレビ コートランカラ ワシントコア コートツテモ コータ
中野さんの 所が テレビ(を)買ってないから 私の所は 買っているも 買いたい

イ コータイケレドモ オマエラ マツトレ。 ナカノサン コータト。(B ナニヤ 笑)
買いたいけれども お前たち 待っている。中野さん(が)買ったと。(B 何を 笑)

ホンツキ° ナカニシジンゴ°ローサントコノ ウチニヤー テレビ イレサシタカラ アレヤ
その次は 中西甚五郎さんの所の 家には テレビ(を)お入れになったから あれだ

ホンア アッコ イレサシタ ホンナ モーチョット ハントシク°レ マツテ ソーシリヤ
そんな あそこ お入れになった そんな もうちょっと 半年位 待って そうすれば

ワシントコモ カエルサケツテ。 マ オカネ アツテモ ソーユー ソノ ジュンイカ° クラ
私の所も 買えるからと言って。 ま お金(が)あっても そういう その 順位が 位が

(注30)

イカ° アツテソノ クライニ ヨツテ モノオ カエタヨーナ ジダイ。(D ソーヤ) イマ
あって その 位に よって 物を 買ったような 時代(だった)。(D そうだ) 今

(注31)

ソンナコトア ネーカ°デ (B ン ン) ジェンサエ アリヤー アシタ クワレイデモ
(は)そんなことは ないので (B うん うん) お金さえ あれば 明日 食べられなくても

エーサケネ。 テレビ ホシーカ オー ソンナラ コーテコイ。 オー。 アノー ナンカ ア
いいからね。 テレビ 欲しいか ああ それなら 買ってこい。 うん。 あのう 何か あ

ノー タイクーデモ チョッコ ウツタンヤサケニチュー。 ソンナラ ン コーテコイ。 コ
のう ~~~~~でも 少し 売ったんだからと言って それなら うん 買ってこい。こ

ンナコトニ ナットルンヤ。 アシタ クワレン… (A・B 笑)

んなことに なっているんだ。明日 食べられない… (A・B 笑)

(注32)

- D ビンボニントー シンダイ エー ヒト ムカシワ モノスケーンノ (A オー) アコラ
貧乏人と 身代の 良い 人 昔は ものすごく (A ああ) あそこ

ノ マネ シンナ アッコラ (A ソー ソー ソー) シンダイヨシヤサケ^テユート
の 真似(を)するな あそこは (A そう そう そう) 身代良しだからと言うと

(B ソー ソー ソー) ア ソーカト オモワレル。 アレシテ。 イマ ンナモナ ビン

(B そう そう そう) あ そうかと 思える。 あれして。 今 そんなもの 貧

(注33)

ボニンモ シンダイモ ネーシュキ°ジャン。

乏人も 身代(良し)もないといった具合だ うん。

- C イマノ コドモワ ガマンシルツチュコト シラン。(B ソーヤ) ネ。(B ンー) ン。 ガマ
今の 子どもは 我慢するということが 知らない。(B そうだ) ね。(B うん) うん。我慢

ンシルコトオ ジェンジェン シランノヤ。 ウン ホヤ オヤ ナーンカネ ヤシエタ サイ
することを 全然 知らないのだ。うん 親(は) 何かね 薄い 財布

フオ カカエテ キリキリ モートルケンドカシテ コドモ ンナモンナ (A・D 笑)

を 抱えて キリキリ舞しているけれども 子ども(は)そんなものは (A・D 笑)

(B コドモノ ユーカ°ニ) オー コドモノ ダイタイ ウーン ドーシルイヤラツツナ。

(B 子どもの 言うことに) うん 子どもの だいたい ううん どうするかというような。

(B ソーヤ ソーヤ)

(B そうだ そうだ)

(注34)

- D ンデ ワテラカッテ ヤッパ ガッコージダイ ンナ ベンキョモ ナンニモ シェン ホンナ
それで 私たちだって やはり 学校時代(は) みんな 勉強も 何にも しない そんな

モナ カラダニ ハネ ツイタホド ンナ トンデアリイテ アノー バッチャメロデ トンデ
もの 体に 羽根(が)付いたように そんな 跳んで歩いて あのう お転婆で 跳んで

アルイトツタケドカ アノー オヤノ オカケ°デ ウチノ オカケ°デワノ アコラノコ アコ
歩いていただけども あのう 親の お蔭で 家の お蔭ではね あそこの子 あそ

ラノコ ホイテ ガッコエ イヤー ピアノ キフシルトラ ネー エーレンナコト シー
この子 そして 学校へ いや ピアノ(を)寄付するとか ねえ いろんなこと

(注35)
キフシリヤ ベンキョア デキーデモ ンナ エーカ°ニ シテアタツテワ。 (笑) シー。
寄付すれば 勉強は できなくても みんな いいようにしてもらえたよ。(笑) うん。

C アニ アニキ アニキワ ホカンモノア (B・D 笑) (D エー) ホカノー ホカノ オヤ ア
兄は ほかの者は (B・D 笑) (D ええ) ほかの 親

(注36)
ニキ ソコノ アニキオー ニサコーチュテ ヨバツタワイネ。 エー ワレオ ユーサヤロ。
そのの 兄を ニサコと言って 呼んだんだよ。 ええ お前を 言うんだろ。

(B オー ソーヤ) ソーヤ。 (B ソーヤ ンー) (A 笑)
(B ああ そうだ) そうだ。 (B そうだ うん)

B ホントヤ。
本当だ。

D ホイテ ンナー…。
そして そんな…。

(注37)
C ウララ ボーユシカ ヨンデアタランダワイヤ (D ソージャ) オン ジンツァンノ ボ
私など ボーと言うしか 呼んでもらえなかったよ (D そうだ) うん ジンツァンの ボ

ーツチュテ。 シー。 ンナ ソノトーリニ キカンボジャツタワイナ (B ソーヤ ソーヤ)
ーと言って。 うん。 そんな その通りに 聞かない坊主だったんだよ (B そう そう)

エー。
ええ。

B ソーヤー キカンボヤサケ ヤツパ コンデ ジンツァンノ ボンサヤー。
そうだ 聞かない坊主だから やはり これで ジンツァンの 坊主だ。

(注38)
C テンノホド キカンボヤツタサケ。
とてつもなく きかない坊主だったから。

D ソイデ ナーンモ ベンキョア デケデモ アッコノコーナラチューテ マー ゲキア アレア
それで 何も 勉強は できなくても あそこの子ならと言って まあ 劇は あれは

ー イチバン サキ ソレア ナンデモ エーコト アリヤ ベンキョア (C シェンシエア)
一番 先 それは 何でも 良いこと(が)あれば 勉強は (C 先生は)

ヒトツモ デキーデモ イチバン サキニワ。
一つも(勉強が)できなくても 一番 先には。

(注39)

(注40)

C カタイモンデネーサケ シェンシエア オイ ナカニシ オマエ ローカエ イッテ タテツト
利口な者でないから 先生は おい 中西 お前 廊下へ 行って 立っ

レ。(A ソー ソー) タテツトルカト オモタラ ウチ イッテ オランカ°ヤサケ (笑)
ろ。(A そう そう) 立っているかと思つたら 家(に)行って いないんだから。

ソヤロ ホンナトコニ オルカワリネ (D ソーヤッテ マー) ホイト ホイト ボー ワ
そうだろう そんな所に いるかわりに (D そうやって まあ) そうすると ボー お

レア ハヤ ガッコア スンダカッチュー。 オー スンダーチュテ ソレテ シコ°ト テツダ
前は 早くも学校が 済んだのかと言う。 ああ 済んだと言って それで 仕事(を)手伝

イ シテヤルト オヤ ヨロコンダ。
(を)してやると 親(は)喜んだ。

(注1) オーテ…「背負う、おんぶする」の意の「負う」にあたるオーが接続助詞のテに続いた形。

小松市を含む石川県内では「負う」「買う」「洗う」「貰う」などのア・ワ行五段動詞の基本形は語末の[-au]の部分が融合した[-o:]となる。

(注2) テー…近畿方言に共通する特徴として北陸方言に聞かれる一音節語の長音化。「手」がテー、「目」がメー、「血」がチーのように発音される。

(注3) イヌイ…話題の人の家の屋号か姓であろう。また、イヌイノ～の「～」の部分は、小松市を含む石川県、そして福井県嶺北地方、富山県に共通に聞かれる文節末、文末などで現れる揺れるような独特の間投イントネーションを示しており、この場合、実際の音調はイヌイノーのようである。

(注4) アイクラ…話題の人の家の屋号であろう。

(注5) アノコァ…小松市方言では助詞の副助詞の「は」(時に格助詞「が」も)の発音が弱化して、このように小さくアが添えられるような発音になる場合が多い。本談話資料中にも随所に現れている。

(注6) トキヤッタカンナ…小松市内の方言では、文節末・文末でここでのナの直前に聞かれるように、小さく鼻音のンが挿入される特徴がある。この特徴も本談話資料中にも随所に現れて

(注7) ホーシト…ホーは指示語「そう」のソがホに変化した形。当該方言では、ソンデ(それで)→ホンデのように、規則的ではないがソ系の指示語でこの特徴の現れることがある。

(注8) デキナンダ…当該方言では打消過去の表現としてデキナンダの～ナンダ以外にもデキンダのように～ンダも併用されている。

- (注9) ツンダッテ…「連れ立って」のツレダッテからツンダッテに変化した形。
- (注10) タツ…話題のお婆さんの家の屋号であろう。
- (注11) オメー…オマエ（お前）からの音変化形。当該方言では同輩からやや目上に用いられる対称代名詞。
- (注12) シェンシェ…個人差や個人の中での揺れも観察されるが、当該方言（高年層）ではセ、ゼは口蓋化してシェ、ジェのように発音されるのが一般的である。
- (注13) ソンカ°ヤ…～カ°ヤは共通語の「～のだ」にあたる方言形。
- (注14) ワカ°…ワカ°のワは「我」の意。ワカ°メ、ワカ°ミ（我が身）で「自分」の意も。
- (注15) ヤエンザ…話者A村上氏に家の屋号。
- (注16) コンダカ°ジャ…コンダは「来なかった」の意。カ°は連体格の助詞「の」に相当するもの。ジャは指定・断定の助動詞「だ」に当たる。当該方言では一般に「だ」はヤとなるが、時にヤより古い形のジャが現れる場合もある。
- (注17) エーサケ…～サケは関西方言の理由・原因の接続助詞「から」に当たるサカイが変化したもの。当該方言では～サカイの形も聞かれる。福井県嶺北地方から石川県加賀地方で使われる。
- (注18) ウラ…福井県嶺北地方から石川県加賀地方南部で使われる自称代名詞。
- (注19) イッショケンメーネ…末尾のネは本来「一所懸命ニ」となるところだが、[ni]の母音[i]の舌の位置が下がり気味に発音される当該方言の特徴のためネに近く聞こえる。
- (注20) シェンナンサケ…～ンナンは「～なければならない」の意の表現。数行下に見えるイカンナンサケの～ンナンも同様。動詞の未然形に接続する。
- (注21) イワシタ…イワシタのシは（注24）のユワツシャルのシャルと同じ尊敬の意の敬語助動詞シャルの連用形シャツの異形態。
- (注22) ヤットタワイヤ…～ワイヤは「～よ」に当たる文末助詞。
- (注23) ヒドネーケリヤ…ヒドネーはヒドナイの変化。当該方言のヒドイは、共通語とは広いニュアンスを持ち、「大変」「苦しくてつらい」といった意味を表している。
- (注24) ユワツシャル…シャルは尊敬の敬語助動詞。
- (注25) アワズ…小松市南部地区にある温泉地の地名。
- (注26) エンチョー…インチョー（院長）のイがエに近く発音されている。
- (注27) アタマカ° アッテモ…アタマカ° アル（頭がある）で「頭が良い」の意。
- (注28) ベンコナ…「生意気な」の意。「弁口な」に由来するか。
- (注29) コータイ…本来ならばカイトイ（買いたい）となるところだが、当該方言を含む加賀地方南部の方言では、コワン（買わない）、コータ（買った）、コー（買う）、コエバ（買えば）、コエ（買え）のように語幹がコで統一されたための形。
- (注30) クライカ° アッテ…「家格の違いのようなものがあって」の意。
- (注31) クワレイデモ…～イデモは「～なくても」の意の表現。ここでは「食べられなくても」の意となり、同様に例えばカカイデモは「書かなくても」の意となる。
- (注32) シンダイ エー…「身代が良い」でつまり「お金持ちだ」の意。すぐ後に名詞形で、シンダイヨシの表現も見える。
- (注33) ネーシュキ°…「ない主義」の意か。
- (注34) ワテ…前出のウラが男女に共通の自称代名詞であるのに対し、ワテは女性が使う自称代名詞

男性専用の自称代名詞としては本談話資料中にも見えるワシがある。

(注35) シテアタッテ…「動詞+テ・デ+アタル」の形で「～してもらえる」の意を表す。何行か後にも、ヨンデアタラングワイヤの表現が見られる。また、このような補助動詞的用法のほかにも、北陸方言ではアタルという動詞が「貰える」の意も表し、「給料がアタッタ(貰えた)」のような言い方をして、しばしば他地域出身者に理解されないことがある。北陸方言話者には、このアタルの用法が方言だとは認識されていない場合が多い。

(注36) ワレ…前出のオメー(オマエとも)に比べ、待遇的意味の低い対称代名詞。

(注37) ジンツェン…話者C中西氏の家の屋号か。

(注38) テンノホド…小松市方言ではこのようなテンノ、あるいはタンナなどの形が程度の激しい様を表すことばとして多用される。タンナはタイヘンナ(大変な)の縮約形で、タンナに変化したあと、テンナ、テンノなどの形として独立して用いられるようになったと推察される。

(注39) カタイ…石川県加賀地方では「固い」の意のほかに、主に子どもの利口な場合の形容語として用いられる。一方、隣の福井県方言では、カタイは「固い」のほか、「体の丈夫な」の意で、「あの人、カテー人や」のように用いられる。

(注40) タテットレ…タテットルの形で「立っている」の意の表現となる。ここではその命令形。すぐあとにタテットルの形も見える。

話題2 時代の変化(約6分)

B ホントジャ。

本当だ。

D マー ホントネー イマノ ジダイト ミヨーモンナラ マン タイバクモナイホド カワツタ。
まあ 本当だねえ 今の 時代と(比べて)みようものなら まあ とてつもなく 変わった。

(B ホーヤネー) テノウラオモテミタイナモンヤ。 ッネー。

(B そうだねえ) 手の裏表みたいなものだ。 ねえ。

A マ アノー イリヨー イリヨーカンケー ソノモノモ ヒジヨーニ カワツタトユーコトワ
ま あのう 医療関係 そのものも 非常に 変わったということは

アノ ワタシラノ オヤタチ ソノ オヤアタリワ ショーショー グワイカ° ワルクテモ
あの 私たちの 親たち その 親あたりは 少々 具合が 悪くても

イシャニ カカルト オカネ イルサケネ ガマンシトツタモ。 ソイデ マー ムカシデ ユ
医者にかかると お金(が)要るからね 我慢していたもの。 それで まあ 昔で 言

ー モーチョーノヨナモンデモ ナンカ イ イーカ° サイテナー ナンカ ソーユコトデ
う 盲腸のようなものでも 何か 胃が 痛んでね 何か そういうことで

コロコロト イッテシマウ。サイキンワ モー ソッデ チョット グワイ ワルイト スク°
コロコロと 逝ってしまう。最近はずもう それで ちょっと 具合(が) 悪いと すぐ

イシャ イクカラ イシャノ テアテカ° ハヤカッタタメニ シジョーニ ヨカッタトユーヨ
医者(に) 行くから 医者の 手当てが 早かったために 非常に よかったというよ

ーヨナコト イリョーカンケーモ ヒジョーニ ヨクナッタツチュ。
うなこと 医療関係も 非常に 良くなったって言う。

B ソーヤ ソーヤ ソーヤ。
そうだ そうだ そうだ。

C ムカ ムカシノ モーチョーチューモノワ オメ シェンケ ハラ ハイッタンカ°。
昔の 盲腸というものは あんた 神経(が)腹(に)入ったのが。

A (笑) シンケ ハラ ハイッタ ソーユート。
神経(が)腹(に)入った そういうと。

C シェンケ ハラ ハイッタツチュ。(A 笑 ソヤ ソヤ) ソ ソレデ…。
神経(が) 腹(に)入ったと言う。(A 笑 そう そう) それで…。

D ^(注1)ゴザッサノ アノー ト アノー カーズノ イマノ カズノ ウエナンカラ ^(注2)(A ウエヤ
ゴザッサの あのう あのう カズの 今の カズの 上(の人)だから (A 上だ

ロニー) アレラ トイタデ カイテカシタツチュ アツラ モーチョーヤトイヤ アワレ
ろう) あんなのを 戸板で 担いでいかせたという あら 盲腸だって 哀れな

タンカ ナイシ。
担架(は)ないし。

A ハラ ウンデシモトツタ。
お腹が腫んでしまっていた。

D ン。
うん。

B モーチョーカ° オー。
盲腸が うん。

D シカ°シタンヤ。
亡くなられたんだ。

(注5)

B ススンドッター (D ン) ホイテー ダチカナンダンヤワ。
(病気が)進んでいて (D うん) そして 駄目だったんだよ。

D トイタン ノシテ カイテカシタットイヤ ユーテ。 (C ホーヤ) イマノ タンカヤンノ
戸板に 乗せて 担いでいらしたんだって 言って。 (C そうだ) 今の 担架だねえ。

二。

C ホイデー キッタケンドー ウンカ° デテシモトッテ〜 クダ ナンボンヤラ サイトー ヤ
それで 切ったけれど 膿が 出てしまっていて 管(を)何本か 挿して や

ットッタケド ソデ ダ トレンダサケ ダメヤツタンヤ。

っていたけれど それで(膿が)とれなかったから 駄目だったんだ。

(注6)

D ウン ツバクラノー (B ハラ イタイ イタイツチュノー コラエテアツタンヤ イチョーカ°
うん 津波倉の (B 腹(が)痛い 痛いというのを 我慢していたんだ 胃腸がね)

(注7)

(注8)

ヤンネー) ヤマク°チノー アノー カーチャンカテ ワレア メンチョデ シカ°シタゾイヤ
山口の あの 母ちゃんも お前 メンチョで 亡くなられたんだ

(注9)

メート アノ アワシャネ デキモノア デキテ。 メンチョデ シカ°シタトイヤ ノー。

目と あの 間に できものが できて。 メンチョ 亡くなられたんだって ねえ。

(B オー) イマ モーチョナンカ オメ キーリヤ ホッデ ウチ アルイテイケツチュ。

(B うん) 今 盲腸なんか お前 切れば それで 家に 歩いて行けという。

B ソノ ソノヒニ モドレル。 ウーン。
その その日に 戻れる。 うん。

D ンナ カワツタモンヤト オモテ。
みんな 変わったものだと 思って。

B ネー。
ねえ。

D イマカラ マン コンデ マン コノ シャバ ドーユカ°ン ナツテク ウララノコトア マー
今から まあ これで まあ この 世の中 どういうふうになっていく(か)私たちのことは

モー サキア インメトルシー (A 笑) エーケド アトノモン ホントニ キニカカッテ シ
まあ もう 先は 見えているし (A 笑) いいけれど 後の者 本当に 気にかかって 心

ンパイン ナルワ。

配に なるよ。

B ソー オモーネ オー ホントニ ソー オモウ。 ンー。
そう 思うね うん 本当に そう 思う。 うん。

D ドーナラヤラト オモテ。 ソーヤロ。
どうなるかと 思っ。 そうだろう。

B イマノ チーサイ コラ マン ドーユー オー ナニオ…。
今の 小さい 子どもたち まあ どういう 何を…。

D ア アレ イヤジャー コレ イヤジャヤロ。 ウン ホンナ…。
あれ 嫌だ これ 嫌だだろう。 うん そんな…。

C イヤー アノ イマカラ モー イマカラ ナンジャロ ンー ガッコー チューカ°ク アタ
いや あの 今から もう 今から 何だろう 学校 中学(生に) 当たる

ルクライノ コドモカ° トシ ヨッタ バアイニ ドルラケマデ イキレルカッチュコトア
位の 子どもが 年を とった 場合に どれだけまで 生きられるかということは

エシヤ ホシヨア デキンチュートルモンネ。

医者(は) 保証は できないと言っているものね。

D ソーヤ。 ン。
そうだ。 うん。

C ネー。 ホンナモンバッカ タベトルカ°ト。 ホシテ ヤッパリー アノー アレヤ スキキラ
ねえ。 そんなものばかり 食べているのと。 それと やはり あの あれだ 好き嫌い

イカ° アルシンノー。 オ。 ホヤサケニ ヤッパ ドーシテモ ワレワレミタイナ コリヤ
が あるしねえ。 うん だから やはり どうしても 我々みたいな これは

ドーデモエー モノァ ナカ°イキシトルンジャ。 ホントワ ハヨ イッテシモート タンナ
どうでもいい 者は 長生きしているんだ。 本当は 早く 死んでしまうと 大変

(注10)

エーカ°ヤケンドカ。

いいんだけども。

D ソレデ イマ コーシテ ナカ°イキシトル ヒトオ ミルト ヤッパシ ムカシカラノーナ
それで 今 こうして 長生きしている 人を見ると やはり 昔からのね

タベモンカ° ナンシテ イキトルケド。

食べ物が 何して 生きていけるけれど。

C ソレトー ワカイトキニ～ カラダオ キタエテアルサケニ～ ヤッパリ タイリヨクテキニ
それと 若い時に 体を 鍛えてあるから やはり 体力的に

ソノ テーコーリヨク アルン。

その 抵抗力(が) ある。

B ソーカネ。

そうかね。

D イマラ ンナ コツラケ アツイト ンナ ウチノモノァ ガマンデキン。ホンナ ヒヤート
今など そんな これだけ 暑いと そんな 家の者は 我慢できない。そんな 冷っとする

シル クーラン ナカ ハイットルヤロ。 (° ホヤ ホヤ) ンー。

クーラーの中(に)入っているだろう。 (° そう そう) うん。

A マー アノー ムカシカラ ミレバ アノ グンタイトットユーモノーカ° ニネンナリ サンネ
まあ あのう 昔から 見れば あの 軍隊というものが 2年なり 3年なり

(注11)

ンナリツチュ コレモ モノスコ°イ ガマンズヨサト シンポーズヅヨサト タイリヨクオ
という これも ものすごい 我慢強さと 辛抱強さと 体力を

ツクルツチューコトニ ヒジヨーニ プラスンナッタト オモンヤ。 イマ ソーユモノァ ナ
作るということに 非常に プラスになったと 思うんだ。 今 そういものは

イカラ…。
ないから…。

C ネーサケ。
ないから。

A ガマンズヨサワ ナイシ ソレカラ シンポーズヨサワ ナイヤロ。 ホイデ グンタイワ ユ
我慢強さは ないし それから 辛抱強さは ないだろう。それで 軍隊は 言
一タイコト ジェツタイニ ユエナンダン。 ユーテモ ソレデ ハカ° カケルヨニ タタカレ
いたいこと 絶対に 言えなかった。 言っても それで 歯が 欠けるように 叩か
タデ。
れたから。

C ソーヤ ソヤ。
そうだ そうだ。

A ソレデ ユワレンケド イマノ コドモワ ミンナ (C ユータイコト ユー) ユータイコト
それで 言われなくても 今の 子どもは みんな (C 言いたいこと 言う) 言いたいこと
ユートルヤロ。
言っているだろう。

C オー。
うん。

A シタイコト シル。
したいこと する。

C ホシテ キーニクワンタンシェナ スク° ボーリヨクヤロ。
そして 気に入らないと すぐ 暴力だろう。

A ホントヤトイ。
本当だって。

C エー。
ええ。

A ン。ソシテ アンタ…。
うん。そして あんた…。

C オヤデモ コロスヨーナコトニ ナッテシモタンヤ。
親でも 殺すようなことに なってしまったんだ。

A カズカ° スクナイカラ ソノ ドーシテモ ソノ。 (C アマヤカス) アマヤカス。 ダカ
数が 少ないから その どうしても その。 (C 甘やかす) 甘やかす。 だか

ラ ソーユウカタ ツヨイカラ アノー オンナノ ヒトモ オノ オトコノ ヒトモ アノ
ら そういう方が 強いから あのう 女の 人も 男の 人も あの

シェンジチューワ モー ホンナ アノー ニク アルワケンナシ サカナモ マ サカナワ
戦時中は もう そんな あのう 肉(が)あるわけではなし 魚も ま 魚は

(注12)
スコシ アツカモシレンド モ ホトンド ヤサイルイデ (C ソー ソー ソー) ジッ
少し あったかも知れないけれど もう 殆ど 野菜類で (C そう そう そう) 実際

サイニ トレタモノバツカリデ (D シューカツ シト…) ショクシトツタツチュコトデ イ
に 獲れたものばかりで (D 生活 して…) 食していたということで 今

マワ カラダ ナカ°モチスルトユウ。
は 体(が) 長持ちすると言う。

A ソーヤワ^ンネー ウーン。
そうだね うん。

A ホレデ チョー ナカ°イコト オレルツチューノワ ソーユ カンカ°エカタデスカラ。
それで 長いこと(生きて)いられるというのは そういう 考え方ですから。

(注13)
イマ アンタ アノ イシバイデ カタメタヨナ ラーメンヤ ソンナモンバツカ クトルカラ
今 あなた あの 石灰で 固めたような ラーメンや そんなものばかり 食べている

ネ コラ ホントニ ハタシテ ナカ°イコト イキテオレルカドーカ ワカラン。
からね これは 本当に 果たして 長いこと 生きていられるかどうか わからない。

C ワカラン。
わからない。

A マ ソー オモテワ オルカ°ヤケド。
ま そう 思っでは いるのだけれど。

C エシヤ エシヤワ ソーユー ハナシオ シル。 (A オー) ン。
医者は そういう 話を する。 (A ああ) うん。

A ホンデ キソカ° シツカリシトラントネ イクラ イー ソノ アノ チューシャヤ クスリ4
それで 基礎が しっかりしていないとね いくら 良い その あの 注射や 薬(が)

アッテモ チョット ダメヤト オモンヤ。 キソカ° シツカリシテルカラ チューシャト…。
あっても ちょっと 駄目だと 思うんだ。 基礎が しっかりしているから 注射と…。

C ワレワレワ チューシャカ° キクンヤ。
我々は 注射が 効くんだ。

A ソー ソー ソレヤト オモー (C ン) (B ソーヤー)
そう そう それだと 思う (C うん) (B そうだ)

(注14)

C カビ ハエタ クッシ クタカッテ ドーモネンヤサケノ (A 笑) チョット チョット
黴(が)生えた お菓子を 食べても 何でもないんだからね (A 笑) ちょっと

(注15)

コスッテ クヤ ソレデ ドーモネンヤケ。 (A 笑) ソヤロ (A ソーヤ) ソレカラ
こすって 食えば それで 何でもないのだから。 (A 笑) そうだろう (A そうだ) それから

モッタイナイ ユッテ ホレンダワ (A・B 笑)。

もったいないと 言って 捨てられなかったよ。 (A・B 笑)。

(注16)

D ホンデ ワカ°メカラ~ ヤッパ~ ムカシカラーノコトオ ユータリナンカ ショー オモテ
それで 自分から やはり 昔からのことを 言ったりなど しようと 思って

(注17)

~ ウチデ ユーケド ナンジャー クソババ コーバクナコト ユーテ チョッコ ムカシノ
家で 言うけれど 何だ くそ婆あ 生意気なこと(を)言って 少し 昔の

(注18)

コト シツトルシキツチューナモンジャ。 シンナ ハナシ キクナッテユヨナモンジャ。
こと 知っているからと言うようなものだ。 うん そんな 話(を)聞くなと言うようなものだ。

コドンドモ ウルサイッテ ユーケレド~ キョァ マン コーシテ~ エー キカイオンナ (B
子どもたちは うるさいと 言うけれど 今日は まあ こうして 良い 機会をね (B

ン) コーシテ アタエテモロタカ°デ〜 (B ソー ソー) キョァ コンナワケデッテ
うん) こうして 与えてもらったので (B そう そう) 今日は こんな訳でと言って

オヒルノ オベントモ イタダイテ (B ンー) ホシテ キョァ コーユコト キーテキタン
お昼の お弁当もいただいて (B うん) そして 今日は こういうこと 聞いてきたんだ

(注19) (注20)
ケ°ケドカッチュテ マーンネ (B ン) アノー ホントニ キタカ°ヤシケ ソノ ハナシア
けれどもと言って まあね (B うん) あのう 本当に 来たのだから その 話が

デキルト オモテ〜 (B ンー ソーヤ) ウチ イッテ コレア エー オミヤケ°ヤト
できると 思って (B うん そうだ) 家(に)行つては これは 良い お土産だと

オモテ ワテ ドードート イオート オモトルン。 (B ソーヤー) ヘージェー ナンデモ
思って 私 堂々と 言おうと 思っている。 (B そうだ) 普段 何でも

ユオート オモテモ キーテクレンモ。 アー マタ クソババ (B 笑) ナンジャラ…。
言おうと 思っても 聞いてくれないもの。ああ また くそ婆あ (B 笑) 何だか…。

ナンジャツチュー ンー。
何だと言う うん。

C ババノ ココ°トヤツチュ。
婆あの 小言だと言う。

D ソーヤッテ。 ウルサイッテ コーユー。
そうやって。 うるさいって こういう。

C マコ°ァ ウルサイジャロ。
孫は うるさいだろう。

D キャー コンナコト キーテキタカ°ヤ ナニヤ ウルサイツチュテ ユオート オモテ°ネー
今日は こんなこと(を)聞いてきたんだ 何が うるさいと言って 言おうと 思ってね

アノ キョーノ キカイオ ヨロコンドル。 ンー。
あの 今日の 機会を 喜んでいる。 うん。

B ホントヤ。 キノーモ アノ ウチ カエッテカラー キンノ キョーワ コーコーンヤデー
本当だ。 昨日も あの 家に 帰ってから 今日は こうこうだから

ハナシオーテ ナンシテキタ ホントニ タノシミナカッター ユーテ (D ンー) ウチ イ
話し合って 何してきた 本当に 楽しかったと 言って (D うん) 家(に)行

ッテ ハナシ シトッタワイネ (笑)。

って 話(を) していたよ。

D ホントヤ ンー。

本当だ うん。

B オモシロカッタ^ンネー (笑)。

面白かったねえ。

D ソーヤ ンー。 ホンデー アノ ヨイ キカイヤト オモテノ。 (B ホントニ コンナコ
そうだ うん。 それで あの 良い 機会だと 思ってね。 (B 本当に こんなこ

ト) コンナ エー バショオネ。

と) こんな 良い 場所をね。

B ホントニネ (D オー) ワタシラ コンナ トシトッテ (D オー) ミナサント イッ
本当にね (D ああ) 私たち こんな 年をとって (D ああ) 皆さんと 一緒

ショニ コンネ ハナシアウッチュコトワ トテモ ナイコトヤニ コンナ キカイニ アワイ^(注21)
に こんなに 話し合うということは とても ないことなのに こんな 機会に 会わせ

テモロッチュコトオ (D ソーヤッテ) ホントニネ (D ホントニ) アンタデナイケド
てもらおうということを (D そうだって) 本当にね (D 本当に) あなたでないけれど

(D ヨロコンドル) ン ヨロコンドル。

(D 喜んでいる) うん 喜んでいる。

(注1) ゴザクサン…話題の人の家の屋号であろう。

(注2) カズ…ゴザクさんと呼ばれる家のある個人の愛称(略称)か。

(注3) カイテカシタ…カイテは動詞カク(石川・福井両県の方言で“二人の人がいっしょにあるもの
のを支え持つ”意で使われる。例:ツクエオ カク(机を二人で持つ))が接続助詞テに続いた
イ音便形。後半の～カシタはイカシタ(いらっしゃった)の縮約形でシは話題1の(注21)と同
じく敬語助動詞シャルの連用形。

(注4) モーチョーヤトイヤ…～トイヤは「～だそうだよ」の意で、伝聞的意味を表す表現。

(注5) ダチカナンダ…ダチカンは「駄目だ」の意で、「埒あかん(埒があかない)」から変化した
形。福井県嶺北北部から石川県加賀地方で用いられる。

- (注6) ツバクラ…小松市西南部、小松バイパス沿いの集落の名。小松市津波倉町。^{ツバクラマチ}
- (注7) メンチョ…両目の間（鼻筋の上の部分）にできる腫れ物の称。この場所にできるとよくないと言われる。
- (注8) シカ°シタ…シカ°は動詞シク°（死ぬ）の未然形相当の形。シカ°ン、シンダ、シク°、シケ°バ、シケ°のように活用する。ガ行五段動詞の音便形は普通、「漕イダ、研イダ」のようにイ音便となるが、この場合は本来のナ行五段動詞の音便形（撥音便）の名残をとどめていると考えられる。シカ°シタの～シタは（注3）の場合と同じく、敬語助動詞シャルの連用形+過去の助動詞タの形。
- (注9) アワシャ…「（ものとももの）間^{かいだ}」を意味するアワサイの音変化形。
- (注10) タンナ…話題1（注38）参照。タイヘンナ（大変な）からの縮約形か。
- (注11) シンポーズヨサ…一般にはシンポーズヨサとなるが、ここではたまたま語的に半濁音ポで発音されたと思われる。
- (注12) アツカモシレンド…～カモシレンドのシレンドがシレンドとなったもの。
- (注13) イシバイデ カタメタヨナ ラーメンヤ…インスタントラーメンのことをさしているか。
- (注14) クッシ…かつての歴史的仮名遣いの「くわ」にあたる合拗音。当該方言をはじめとする石川県内の方言では、高年層で今もなおしばしば聞かれる発音。
- (注15) ドーモネンヤケ…ドーモネンヤサケの～ヤサケが～ヤケとなった形。
- (注16) ワカ°メ…ワカ°ミ（我が身）の変化形で「自分」の意。話題1（注14）参照。
- (注17) コーバクナ…コーバクナとは、金沢方言などでも子どもの「利口な」様や「ませた」様子を表すとされるが、ここでは「利口な」様が度を過ぎて「生意気な」に近いの意で用いられている。ちなみに、石川県内では雌のずわい蟹をコーバコあるいはコーバクと呼び、「香箱・紅白」の字が当てられることがある。
- (注18) シットルシキ…～シキは～サケの音変化形。～サケは原因・理由を表す～サカイからの変化形。話題1（注17）参照。～サカイ→～サケ→～サキ→～シキのように変化したもの。当該方言では～サカイ、～サケが一般的で、ここでの～シキや（注20）の～シケはたまたま音声変種として現われた形と考えるべきであろう。
- (注19) キーテキタンケ°ケド…キーテキタンカ°ヤケド（聞いてきたのだけれど）からの変化形。～カ°ヤが～ケ°を経て変化したもの。～カ°ヤは共通語の「～のだ」にあたる方言形。
- (注20) キタカ°ヤシケ…キタカ°ヤの～カ°ヤは（注19）と同じ「～のだ」の意。～シケは（注18）と同じ原因・理由を表す～サカイからの変化形～サケからの変化。
- (注21) アワイテ…「出す」などのサ行五段動詞が「て」や「た」に続く（連用形）とき、ダイテ、ダイタとなるサ行イ音便と同じで、アワシテ（合わせて）がアワイテとなった音便形。

話題3 戦時中の話（約6分30秒）

- A ナカ°イキシタ カイ アツタンネーカ (B オー ホントニ) (D ソーヤッテ) (B イヤ
長生きした かい(が)あったのではないか (B ああ 本当に) (D そうだって) (B いや

ホントニ 笑) ノー シェンソン シェンソントキネ〜 (B ン一) チーチェー コンナカ°
本当に) ねえ 戦争の時にねえ (B うん) 小さい こんな

オイテ ダンナ ヘータイニ イクシ。 ネ。 クローシタカ°ヤ。 (B ソーヤ) オー。 ワ
を置いて 夫が 兵隊に 行くし。 ねえ。 苦労したのだ。 (B そうだ) うん。 私

シラン コトア ヒトリモンノ トッキヤサケネ (A 笑) カワツタトコ モーテアルイテ カ
の ことは 独り者の 時だから (A 笑) 変わった所(を)跳び回って歩いて体

ラダ ゲンキヤシ ノ カワツタモン クテ オー タマニヤ ソレ アタラン モノノ アタ
元気だし ね 変わったもの(を)食べて たまには それ もらえない 物の 貰え

ラン ヒーモ アツタケド〜 アタルトキア マタンネ ナイチニ オツテァ ジェンジェン ミ
ない 日もあったけれども 貰える時は またね 内地に いては 全然 見

タコトモネーヨナ モン フィリピンアタリデア コンナ デケー イットカン フタツ アワ
たこともないような もの フィリピンあたりでは こんな 大きい 一斗缶(を) 二つ合わせ

イタヨナ クンノ ナカエ アイスクリームカ° ハイッタカ° (B ン一) ソレ マニラノ
せたような 缶の 中へ アイスクリームが 入ったもの (B うん) それ マニラの

レイトーソーコカラ ダイイッシェンノ チカクマデ オクツテクルン。 ソレオ アノ ハン
冷凍倉庫から 第一戦の 近くまで 送ってくるの。 それを あの 飯

コーノ コノ オカズ イレル アレ アルカ°ンネ アレ ダイタイ ニコーホド ハイル
盒の この おかず(を)入れる あれ あるよね あれ だいたい 2合ほど 入る

ワイネ。 アレネ イッパイホド アタルンヤサケ イッペンネ。 ノ ホンナモン ナイチニ
よ。 あれに 一杯ほど 貰えるんだから 一度に。 ね そんなもの 内地に

オツテ アタランカ°ヤ (B ン一) ソレト アノ シロモモノ クンズメ。 コレモ イット
いて 貰えないよ (B うん) それと あの 白桃の 缶詰。 これも 一斗

カンヤ。 (B ホ一) ソンナモン カクハンエトカ プンタイエ ンナ ハイキューン ナルン。
缶だ。 (B ほう) そんなもの 各班へとか 分隊へ みんな 配給に なるの。

ソレニ アノー ホワイトアスパラカ。アレ ハジメテ クワサレタトキニ ゲァ デヨト シ
それに あのう ホワイトアスパラカ。あれ 初めて 食わされた時に 嘔吐しようとした

タワイ (笑) ハジメテ クタサケ アレ イッペン。(A アソーカ オー) オー。カン
よ 初めて 食べたから あれ 一度 (A あそうか うん) ああ。缶詰

ズメデ。 グンタイノー アノー ホゾンシヨクニシテ チャント ツクッテアッタ ソレオ
で。 軍隊の あのう 保存食にして ちゃんと 作ってあった それを

ソラ マニラノ ヤセンソーコ グンタイ トッタモンヤサケ。ソレデマタ コノ ソ ニホン
そら マニラの 野戦倉庫 軍隊(が) 占領したものだから。それでまた この 日本軍

グンノ トコエ ハイ ハイキュー クルワケヤ。
の 所へ 配給(が) 来るわけだ。

(注5)

A イヤ ソヤケンドモ ナカノサンナンカーツタラ コッチニ アンタ オツテデイテ ンナ オ
いや そうだけれども 中野さんなんかと言ったら こっちに あなた いらして みんな 男

トコノ ヒトカ° アンタ ドンドン ドンドン ヘータイニ イットツテ オトコノヒトツテ
の 人が あなた どんどん どんどん 兵隊に 行っていて 男の人って

ナーモ ヨケ オラナンダツタンチュンジャ。 マツリデ アローカ° ボンオドリデ アロー
何も たくさん いなかったというんだ。 祭りであろが 盆踊りで あろう

カ° ナンジャカンジャ ソ ソノトキァ ドーシテアツタカ°ヤ ココラ。
が 何だかんだ その時は どうしてあったの この辺(は)。

D オトコノ ヒトラカ ン (A オトコノヒト オツテンネーサケ オマエラ ドーシテ
男の 人たちが うん (A 男の人が いないから お前たち どうして

アツタンヤ) ソノ トキァ ボンオドリモ オマツリモ アレヤワネ (A ネカツタン) ン
いたんだ) その 時は 盆踊りも お祭りも あれだよな (A なかったの) そ

ナ オドリナンテ ナカッタ ナカッタ。(C ホトンド ネーワイ) ナイ。 チョード ウ
んな踊りなんて なかった なかった。(C ほとんど ないよ) ない。 ちょうど 家

チニ アンネー アノー ハチカ°ツノ ジューヨッカニ ドーイン ナツタカ°ヤ。(A ホー)
に あのね あのう 8月の 14日に 動員(に) なったんだ。(A ほう)

(注6)

ジューヨッカ チョーナイカ° アノー クチョーデ ヨツライヤツタカ°。 ソノトキニ キタ
14日(は) 町内が あのう 区長(の家)で寄り合いだったの。 その時に 来た

カ°ヤカ° ジューヨッカニ ドーインナ キテ ホシテ ニジュークニチネ アノ シュッシエ
のだけれど 14日に 動員が 来て そして 29日に あの 出征だっ

ーヤッタ。 カナザワ ヘッタカ°カ° ジューヨッカヤッタネ ドヤツタン。 ソシテ アノー
た。 金沢(の部隊へ)入ったのが 14日だったね どうだったか。そして あのう

シュッシエーシタカ° ソノツキノ ニジュークニチヤツタカ°。 ナーモ ジェンプ ナンニモ
出征したのが その月の 29日だったが。 何にも 全部 何にも

ネー ナカッタワネ。 ソンデ クノ インナ ザイショーモ ドコモ ネンナン ネット (D ン
ない なかったよね。 それで 区の みんな 村も どこも みんな ね (D う

ソーカモシレン) シェンソーノ ナンヤサケネ (A ホ ホイデ コメナンカ オメ ヨケ
ん そうかもしれない) 戦争の 何だからね (A それで 米なんか お前 余計

~~~~) コメ ソノ トシァンネー ウチニ ア アノー ナカダ ナカダイヤ。 ナカヤネ  
に~~~~) 米(は)その 年はね 私の家に あのう ナカダだよ。 ナカヤに

ー ソンデモ ナンヤツタカ ナイサノカ°モ ツクツテ ヨケ ツクツタトキ ソンナ ドー  
それでも 何だったか ナイサの家のものも 作って たくさん 作った時(に)そんな

(注7)  
インナ クルツチュコト シランシ ナカダノ トーチャナ ゲンエキネ タイ ヘーラシ  
動員が 来るということ(は)知らないし ナカダの(家の)父親が 現役に 隊(に)入られた

タンヤ。 ホィタラ タンボ ツクレンチュコトデ ウチノ トーチャンナ ヨケー アノー  
んだ。 そしたら 田んぼ(が)作れないということで 私の家の 父ちゃんが 余計 あのう

アッコノブンモ ツクツテ ヨケ トツタカ°ヤ ツクツタンヤ。 ソレ オイテ ソンナコト  
あそこの分も 作って たくさん 獲ったんだ 作ったんだ。それを 置いて そんなこと

シラズ コドモ シトリ オイテ パーチャント サンニン オイテ シュッシエー サシタ  
知らないで 子ども 一人置いて 婆ちゃんと 3人(を) 置いて 出征 なさった

カ°ヤ。 ソイタカ° ソノトキ チョードンネー アノー ソーネンダン。 (C テッダイニ)  
んだ。 そうしたら その時 ちょうどね あのう 壮年団。 (C 手伝いに)

オー シェーソーネンダンワ イマヤケド ムカシワ ソーネンダンヤツタ。 (C ソーネン  
ああ 青壮年団は 今だけれど 昔は 壮年団だった。 (C 壮年団)

ダン) ソーネンダンノ ヒトラ ンナ テッダイ シテツクレタ。  
壮年団の 人たち(が)みんな 手伝いをしていってくれた。

C ソノトキネー ガンナツテ ニューインシトツタンネーケドネー。  
その時に 癌になって 入院していたのではないけれどねえ。

D (笑) ソーヤ。 (C エー) トーチャンノ センチ…。  
そうだ。 (C ええ) 父ちゃんの 戦地…。

C ヘータイ デテイットルンネー。 ソシテ イモートネ〜 ワシト イッショノ イモートネー  
兵隊(に) 出ていっているんだよ。それで 妹に 私と 同じ年の 妹ね

(注8)

ソノ コドモ オワイター (D カワリニ) ホシテ キシャ キシャノー オ デテ シュツ  
その 子ども(を)おんぶさせて (D かわりに) それで 汽車の 出て 出征

(注9)

シェーデ キシャニ イクカ<sup>o</sup>オ コドモ ミシエトテ コーヤツテ ホントノ オヤ ヨコ  
で 汽車に 行くのを 子どもに見せたくて こうやって 本当の 親(は) 横(を)

ムイテテ (A 笑) ナニ コドモダケ ミシエルヨナ カッコシテ オッタトユンヤノー。  
向いていて (A 笑) 何 子どもだけ 見せるような 格好をして いたと言うんだねえ。

(A アー ソーカ)

(A ああ そうか)

D ソーヤ。ヨー オマエ オボエテゴザッタ。 (A・B・D 笑) ソーヤ ソノ オ ソノトーリ  
そうだ。よく お前 覚えていらしゃった。 (A・B・D 笑) そうだ その その通りな

ナンヤ。 ネ ソンナトキモ アッタ。

んだ。 ねえ そんな時も あった。

A ソッデー アレカ アノー コメワ モチロン ソッデー アノー ジューブンデ ネーサケネ  
それで あれか あのう 米は もちろん それで あのう 十分で ないからね

ソレデ ア…。

それで あ…。

D アノトキネワー コメオ アキン ナツタラ ソンデ ヨーナツタ シュッシャーシテ アンタ  
あの時には 米を 秋に なったら それで 良くなった 出征して あなた

トーチャン ニューインシトツテモ コッデ デレナンダケド。 アノー コメ トル アキン  
父ちゃん 入院していても これで 出られなかったけれど。あのう 米 獲る 秋に

ナツトラ ヨーナッテ ウチ キテー ソシテ アノ ンナ ソーネンダンノ ヒトラネ テッ  
なったら よくなって うち(が)来て そして あの みんな 壮年団の 人たちに 手伝

ダイ シテモロテ～ ホシテ アノ ウススツテ ヒョーニシテ ヒョーニカテ ンナ シテモ  
い してもらって そして あの 臼摺りして 俵にして 俵にも みんな

ロ シニキテ ソーネンダンノ ヒトラ テツドーテ オー クレマシタ (A ホカノ ヒト  
しに来て 壮年団の 人たち 手伝って うん くれました (A 他の 人

カ° キテクレタンヤ) オー オー ソーネンダンノ ヒトラ ンナ テツテネ ン。  
が 来てくれたんだ) うん うん 壮年団の 人たち みんな 手伝いに うん。

A ワシャー ウチノ バーチャンニ バーバヤシノ (D ン ン) オヤノオヤニ キータンヤケ  
私は 自分の家の婆ちゃんに バーバだね (D うん うん) 親の親に 聞いたんだけ

ドー コメヤ ソンナモノァ ノーテァ オメ イツ コメ チョッコリ モットツテモ イッ  
れど 米や そんなものは なくては あなた いつ 米(を)少し 持っていても 一斗

(注10)

トカンノ ガンガン ナカエ イレテ トットカンコトネワ ナンドキ クワンノヤ ワカラン。  
缶の 缶(の) 中へ 入れて とっておかないことには いつ 食べるのかわからない

ソレト アトァ エモヤラ エモズルヤラ ソーユーモンバツカリ ケッコー クットツタツチ  
それと 後は 芋や 芋蔓や そういうものばかり 結構 食べていたと言

ユカ° ソレア イツコ°ローヤツタカ°カ。

うが それは いつ頃だったのか。

C ソリヤ モット オソイ。 (D オソイ オソイ) (A オソイカ°カ) (D イモズルトカ ナン  
それは もっと 遅い。 (D 遅い 遅い) (A 遅いのか) (D 芋蔓とか 何

トカ…) シェンソーノ カンケーデヤゾ。

とか…) 戦争の 関係でだぞ。

A オー ソーヤ センソーノ カンケーデ。

うん そうだ 戦争の 関係で。

C ソレナラ モット オソイ。  
それなら もっと 遅い。

A コミヤー ナーモ ヨケ ナイシ (C シン) クーモノァ ノーテ (C シン) サ サツ  
米は 何も たくさんないし (C うん うん) 食べるものは なくて (C うん) さつ

マイモヤラ ソンナモン ニテ ソンナカエ イモズル イレテ (D ソー ソー) イヤ コ  
ま芋や そんなもの(を)煮て その中へ 芋蔓(を) 入れて (D そう そう) いや

ナカノサントコラ ザイバツヤサケ イクラデモ クエタヤロケド ホイデ ノーテ ドーム  
中野さんの所など 財閥だから いくらでも 食べられただろうけれど それでなくて

ナランダ イットカンニ ガンガンノ イットカンダケ イレテ コメオ オイタト。  
どうもできなくて 一斗缶に 缶の 一斗缶だけ 入れて 米を 置いたと。

C オメントラノ ソレ タンボ ツクットランダサケ。(A オー ツクットラン) ジェンジェン  
あなたの所の それ 田んぼ 作っていなかったから。(A ああ 作っていない) 全然

(A オー ソヤ ソヤ) ケンド ココラネァ〜 コレァ アルトコエ モツテツテ タンボモ  
(A ああ そう そう) けれども ここらには これは ある所へ 持って行って田んぼも

ナンマイカ ツクットルサケネ。ソリヤ (D オ ソーヤ ソヤ) クーモンニワ フジュー  
何枚か 作っているからね。それは (D うん そうだ そう) 食べるものには 不自由

シェンワイノ。  
しないよ

A ソシテー ウラントコーラモ…。  
そして 私の所なども…。

B ホイト ヤツパ デンキノ カンケーデ モライ アルヤロ。オー。  
そうすると やはり 電気の 関係で 貰い(が)あるだろう。うん。  
(注11)

A オー ソヤ。モライ アルサケ ホンナ ジブンデモ。ソシテ オマケネ ソノ イットカ  
ああ そうだ。貰いが あるから そんな 頃でも。そして おまけに その 一斗缶の

ンノ ヤツカ° ソノー イチネンモ ニネンモ ホットイタタメニ ムシア ハイッテシモテ  
やつが その 1年も 2年も 放っておいたために 虫が 入ってしまったて



(笑) クワレンヨンナツタンヤツテ。 (C クワレンヨンナツタモ モタレンヨンナツタ)  
食べられなくなったんだって。 (C 食べられなくなったもの 持てなくなった)

(A 笑) ウラントコノ イモートカ° イツモ ユン。 コンノ ムシニ クワスクライナラ  
(A 笑) 私の所の 妹が いつも 言う。 この 虫に 食わせる位なら

ウラニ クワシルコトニ ヒトツモ クワサント コノ ヒデーメネオータッチュ。  
私に 食べさせるべきなのに 一つも 食べさせないで この ひどい目に会ったと言う。

C アレワ モット オソイ (A アー モット オソイカ) ソリヤー ショーワジュークネンカ  
あれは もっと 遅い (A ああ もっと 遅いか) それは 昭和19年か

(D ン シューシエントー ज्याロ。 ン) ニジューネンアタリ。 ン ホンナ ジブンヤ。  
(D うん 終戦当時だろう。 うん) 20年あたり。 うん そんな 頃だ。

ウララ ソレデ アニキヤー ショーシュ ウケタ オメントコノ アトヤ。 (B ウン ウン)  
私 それで 兄が 召集 受けたのは お前の所の 後だ。 (B うん うん)

チョット (D オン ソーヤ。 オン。 ソーヤ) ソシテアー アノー ワシノ ジュークアー  
ちょっと (D うん そうだ。 うん。 そうだ) そして あのう 私の 19の時

(注12) (注13)  
ノトッキヤケド~ ナカ°サキノ ハタバカラ モドツテキテ ソシテアー ジュークノ トシノ  
だけれど 長崎の 機場から 戻ってきて そして 19の 年の

アキト ハタチト ニジューイチト ニネン ソレデ サンネンカン アキ シテ ソシテ ゲ  
秋と 20歳 21歳と 2年 それで 3年間 秋仕事をして そして現

ンエキデ イッタワケヤ。 (B ン ン) ホイデ ロクネンハン オツテ モドツテキタワ  
役で 行ったわけだ。 (B うん うん) それで 6年半 いて 戻ってきたわけ

ケヤ。  
だ。

(注14)  
D ホンデ ゴロエモンサンノ トーチャンナ イワシタ。 ヒフク ンナ ワレ シェンジチュー  
それで 五郎衛門さんの 父ちゃんが おっしゃった。火吹竹 そんな お前 戦時中だけ

(注15)  
ヤケド ワツラントコエ ヨセテモロヤ ホンナ ケブタイ タクモン ヒトツ タクコトァネ  
ど お前の所へ 寄せてもらえば そんな けむたい 焚き物 一つ 焚くことはない

アッチモ コッチモ デンネット ヘヤモ デンネツデ アタタメタ トコエ ヨシエテモツテ  
あっちも こっちも 電熱と 部屋も 電熱で 暖めた 所へ 寄せてもらって

ソシテ ワレカラー コーリザトー モツテ クーヤラー アノー ケッコヤッタ ユーテ。  
そして お前から 氷砂糖(を) 貰って 食べたり あのう よかった(と) 言って。

ンー。 アンナ トキネ ンナ ワリニ コーリザトー モツテ (B ホントカイヤ) ワレ  
うん。 あんな 時に みんな 割に 氷砂糖 持って (B 本当かい) お前

オー ホイテ～ ケッコヤッター ユーテ。  
ああ そして よかった(と) 言って。

(注1) コンナカ°…カ°は連体格の助詞「の」に相当するもの。ここでは「こんな(小さい)子ども」の意。

(注2) モーテ…モーは「回る」に意のマウ(舞う)の変化形。話題1(注1)参照。

(注3) クンズメ…かつての歴史的仮名遣いの「くわ」にあたる合拗音。話題2(注14)参照。当該方言をはじめとする石川県内の方言では、高年層で今もなおしばしば聞かれる発音。

(注4) ゲァ デヨト…ゲカ° デルで「嘔吐する」の意。嘔吐する際の擬声語ゲが「嘔吐」の意の名詞となったもの。

(注5) ソヤケンドモ…逆接の接続助詞「～けれども」にあたる～ケンドモ。当該方言では～ケドとともに～ケンドモ用いられる。

(注6) クチョーデ ヨッライ…クチョーは区長で村の代表者の職名。ヨッライはヨリアイ(寄合い・集会)からの音変化形。

(注7) ドーインナ…ンの後に格助詞カ°が続くとき、このようにナに変化することが多い。すぐ次の行にもトーチャンナ(父ちゃんが)の例が見られる。

(注8) オワイテ…オワシテ(負わせて)のサ行イ音便形。話題2(注21)参照。

(注9) ミシエトテ…～トテは「～たくて」の意の表現。カキトテ(書きたくて)、イキトテ(行きたくて)などもその例。

(注10) ガンガン…本来、缶を叩いたときの擬声語であったものが缶をさすようになったもの。

(注11) モライ アルヤロ…商売をしている関係で「物を貰うことがあるだろう」の意。

(注12) ナカ°サキ…小松市北西部、北の根上町との境に近いところに位置する集落。小松市長崎町。

(注13) ハタバ…織物工場の意。

(注14) ゴロエモンサン…話題の人の屋号か。

(注15) ワラントコエ…ワラはワレラからの音変化形。ワレは主に同輩以下に使われる対称代名詞。話題1(注36)参照。

話題4 子どもの頃の遊び(約11分30秒)

A ソレデ アノー チョット ワダイオ カエテ (D ハイ) アノ ミナサンカ°タノ アノー  
それで あのう ちょっと 話題を 変えて (D はい) あの 皆さん方の あのう

コドモノ トキノ (B・D ン) ドーユ アソビ シタトカ **ド** **ド** コドモノ トキニ ド  
子どもの 時の (B・D うん) どういう遊び(を)したとか 子どもの 時に ど

ーユ アソビ シタトカ ドーユコトデ ドーシタトカッチューヨナ ハナシオ スコシ ワダ  
ういう遊び(を)したとか どういうことで どうしたとかというような話を 少し 話題

イオ カエサシテモライタイト オモウンヤ。 デー コドモーデ マ オトコノシトワ オト  
を 変えさせてもらいたいと 思うんだ。 で 子どもで まあ 男の人は 男の

コノ アソビ オンナノヒトワ オンナノヒトノ アソビ トユーヨーナ カタチデ コドモノ  
遊び 女の人は 女の人の 遊び というような 形で 子どもの

トキノ ハナシオ チョット シテホシーナート オモウン。  
時の 話を ちょっと して欲しいと 思うの。

C マー ユキァ キエテ スクナッテクルト オンミヤサンカ° マー オモナ アソビバヤツタ  
まあ 雪が 消えて 暖かくなってくると 神社が まあ 主な 遊び場だったか

カモシレンノー オトコワ。  
もしれないねえ 男は。

D ウララ ヤッパ オテラヤ。  
私は やはり お寺だ。

B ソーヤ。  
そうだ。

D オー オテラー アノ フユンナット コモデ チャーント…。  
ああ お寺(は) あのう 冬になると 菰で ちゃんと(雪囲いして)。

C ソリヤ ソリヤ フユンナルトヤ。 (B・D オー オー) ウララモ ソリヤ フユンナルト  
それは 冬になるとだ。 (B・D うん うん) 私なども それは 冬になると(寺

イッタヨ。 ホイテ ウラ アノー。  
に)行ったよ。そして 私(は)あのう。

B オジャミ ツクッテ (C パースデー) オジャミデー (D ン) アノ ハンダンノ ト  
お手玉(を) 作って (C 面子で) お手玉で (B うん) あの 階段の 所

コーデ (C ヤッタモンジャ) アノー オジャミオ シテ アソブトカ (B ン) ネー  
で (C やったものだ) あのう お手玉を して 遊ぶとか (B うん) ねえ

ソーユーコトシテ フエンナルト アソンドッタシ〜。  
そういうことをして 冬になると 遊んでいたし。

D ワテラ ヤッパ キカンボヤツカ〜 アノー フクロ イマデワ カイモンブクロカノ (B  
私など やはり やんちゃな子だったのか あのう 袋 今では 買い物袋かね (B

(注1)  
ン) アーユ フク ウツクシ フクロンナカエ〜 アノ イシデモ ホイテ チョッコ アノ  
うん) ああいう 綺麗な 袋の中に あの 石でも そして ちょっと あの

カミクズノカ° カ アノー カルイカ°ニシテ ホイテ コーシテ オツテ アノ ホカカラ  
紙屑のが あのう 軽いものにして そして こうして 折って あの 他の(所)か

(注2)  
カイモンニ イツテキテ オトイタカ°ミテニ シテ (B ン) ソシテ オテラノ アノ  
ら買い物に 行ってきて 落としたように して (B うん) そして お寺の あの

モンノ カケ°カ° カクレトツテ (B オー) ソシテ ミチノ (C へ ヘロテイクカ°オ  
門の 陰で 隠れていて (B うん) そして 道の (C 拾っていくのを

(笑)) オー ソシテ ソコニ オトイテ (C ソレ ミテ ワロトツタ (笑)) ソコニ  
) うん そして そこに 落して (C それを見て 笑っていた) そこに

オツテ ミトルカ°ヤ。 ホイト アラー コリヤ アレ ナンジャロ アレ アノ ハナカミデ  
いて 見ているんだ そうすると あら これは あれ 何だろう あれ あの 鼻紙でもな

モネーシ ワレ フクロジャ コリヤ ダレカ ナンカ オトイテイッタカ°ジャカ°ナー ユー  
いし お前 袋だ これは 誰か 何か 落していったんだなあと 言っ

テ〜 (C ヒトノ デー) マー ヒトリデ ユ ユーテンカ°ジャ (B オー オー ン)  
て (C 他人の で) 一人で 言っているんだ (B うん うん うん)

アル オッカ ホノ オッカモ ナ シットル。 ホシテ マエ ミテ ウシロ ミテ (B  
ある(家)のお母さん そのお母さんもみんな知っている。そして前(を)見て 後ろ(を)見て (B

オー ソーヤ マワリオ) ダレカ アルトルモノ<sup>(注3)</sup>。 ホシテ コーシテ モツテカッシャル  
うん そうだ 周り(を) 誰か 歩いている者は(いないか)。そして こうして 持っていらっし

ンヤ。 (B オー オー) イヤー ワッラ モツテッタデト オモタラ アラー アッコノ  
やるんだ。 (B うん うん) いや お前たち持って行ったよと思って あら あそこの

オッカチャンヤ。 ウチ イツテ…。 (A・B・C 笑) モーヒトツ マタ チョット オボタ  
お母さんだ。 家に 行って…。 (A・B・C 笑) もう一つ また ちょっと 重ため

<sup>(注4)</sup>  
メノカ° コッチニ オイタル。 ント マタ コシラエテワ。 ソーユ ワルイコト。 ヤッパ  
のが こちらに 置いてある。そうすると また 作っては。そういう 悪いこと。 やはり

キカンボヤツタンヤナ ワルイコトバツカリシテ。 ンー ソレカ° オモシロテ。 (A アー)  
やんちゃな子だったんだね 悪いことばかりして。 うん それが 面白くて。 (A ああ)

オー。

うん。

A アノ ワタシラノトキヤ アノー コンナ パー。 (B オー オー ソーヤ ソーヤ ソー  
あの 私たちの時は あのう こんな 面子。 (B うん うん そう そう そうだ

ヤ オー オー) ジュンク°リコンニ シテ コンナ パー コレオ アタマニ コー グルグ  
うん うん) 順番に して こんな 面子 これを 頭に こう ぐるぐ

ルニ シテ (D オー アブラツケテ) アブラ ツケテ コンナ シタエ クルーント コ  
るに して (D ああ 油をつけて) 油(を) つけて こんな 下へ くるりと こう

ナカエ ハイッテクルト トレルカ°ヤ (C ス スクーヨーナ) (D オー ソヤ ソヤ) ア  
中に 入ってくると 取れるんだ。 (C すくうような) (D ああ そう そう) あ

<sup>(注5)</sup>  
ソヤサケ ワザワザ アタマニ コー ワンコニシテ ソノ パーオ シテワ アソンデワ イ  
だから わざわざ 頭に こう 丸くして その 面子を しては 遊んだよ い

ヤ トッタタラ トラレタタラ イヤ ナンシタタラ ソ ソレオ ワカ° スンデシマウト  
や 取ったとか 取られたとか いや 何したとか それを 自分のものがなくなってし

ウチノ ヒトニ コーテクレツチュテモ ジェンナ イルサケニ コーテアタランウチニ ナン  
まうと 家の人に買ってくれと言っても お金が 要るから 買ってもらえなかった間に

(注6)

トカシテ カ カタンナント オモテ ソーユコト シタモンヤ。 ホイテワ コンクリ シテ  
何とかして 勝たなくてはいけないと思ってそういうことをしたもんだ。そして コンクリート

ネーサケ ゲタデワ マッスーク°ニセント パーカ° スーット ヘーランダニ ゲタデワ コ  
にしてないから 下駄では まっすぐにしないと 面子が すうっと入らなかったの で 下駄で

コ シキッテワ アノ ツチノ トコ ケズツテワネ ソ ソーユ アソビワ ケッコー シタ  
は ここを仕切っては 土の 所(を)削ってわね そうい う 遊びは よく した

モンヤ。  
も の だ。

D ソーカイ。  
そうか。

A オー。  
うん。

B ノー。  
ねえ。

C ソレト アノー ジテンシャノ リム。 (A オー) アレオ ジテンシャヤノ イッテ フ  
それと のう 自転車の リム。 (A うん) あれを 自転車屋の 行って 古

ルシーカ° モロテキテ ホイテ タケノボーデ コーヤッテ オシテアルイテ ウンドバデ  
いのを 貰ってきて そして 竹の棒で こうして 押して歩いて(学校の)校庭で

モーテアルクカ<sup>ン</sup>ノ (B ン ン ン) (D ソー ソー) ソンナケナ ゴッスンクキ° ウチ  
回って歩くかね (B うん うん) (D そう そう) そうでなければ五寸釘(を) 家

(注7)

カラ モツテデテ ホシテ コーアッテ サイテワ コー スージ ヒーテ ノッ。 ジントリ  
から 持って出て そして こうやって(地面に)挿しては こう 筋(を) 引いてね。 陣取り

ツテユーカ ソーユコト シタモンジャワイ。 (B ホントヤ) ン イマンテナ ソンナ エ  
というか そうい う こと したもんだよ。 (B 本当だ) うん 今みたいな そんな 良

ー ゲーム シルカ° アルワケンナーシ。 (D ソーヤ) ソヤロ マンカ°ノホンカ°カッテ  
い ゲーム(を)するのがあるわけではない。 (D そうだ) そうだろう 漫画の本だって

アルカ°ンナーシ。

ないし。

B ソーヤ。

そうだ。

A ソレカラ マ タベモンク°ライニ シルト アノ カイコサンノ クワ (B ン) カイコサ  
それから まあ 食べ物(の話を) すると あの 蚕の 桑 (B うん) 蚕に

ンニ クワオ ヤル。 アノ ローソートカネ ローソーノ ミーアタリア モ モノスケ° マ  
桑を やる。 あの ローソーとかね ローソーの 実あたりは ものすごくま

(注8)

オイシーツチューカ タダ クタカ°ヤモシレンネ アノ ハタケ イッテワ モンデキテワ  
おいしいと言うか ただ 食べたのかもしれないね あの 畑(に)行っては もいで来ては

クチノ ウワー ドシク°ローナル。

口の 上(が) どす黒くなる。

D イヤ アマズツパイ ウマカッタ。

いや 甘酸っぱい おいしかった。

B ローソー ウモネーカ°ヤ。 (A ア)

ローソー(は)おいしくないんだ。 (A えっ)

C カネコ ウマカッタンヤ。

カネコ(が)おいしかったんだ。

D カネコカ°…。

カネコが…。

A カネコケ。 カネコカ° ウマカッタカ°カ。

カネコか。 カネコが おいしかったのか。

B カネコト アノ ジク°マトノー ミーカ° ウマカッタ。 アノ ミア。 (A ソレカ° ウマカ

カネコと あの ジグマトの 実が おいしかった。あの実は。 (A それが おいし

ツタカ°カ) アノ ローソァ アマミア ナカッタモ。(A ヨー イッテ クタ)  
かったのか) あの ローソーは甘味は なかったもの。(A よく 行って 食べた)

C ソヤ ソヤ クローイ アオク°ロイ  
そうだ そうだ 黒い 青黒い

B オ オ デカイ ツブヤケド アンマリ。  
大きい 粒だけれど あまり。

A (笑) クチジュー ムラサキイロニシテ。  
口中(を) 紫色にして。

B ソー ソー。  
そう そう。

A ホシテ アレオ アノ ハタケ イッテ ソイデ アノー オヤタチャー アノ カイコニ  
そして あれを あの 畑(に) 行って それで あのう 親たちは あの 蚕に(やる)

(注9)  
クッー キツタリ コイダリシテ ニク°ルマン ツム ソノ アイダ (B ン) ハタケノ (B  
桑(を) 切ったり こいだりして 荷車に 積む その 間 (B うん) 畑の (B

ソーヤ マワツテ) ソコラジュ イッテワ ボァ ドコイッタンヤ ボァ ドコイッタンヤ  
そうだ 回って) そこら中(に)行っては 坊主はどこに行ったんだ 坊主はどこに行ったん

ユト ボァカ° ソレデ ソレオ クワノミオ クーカ° イソカ°シー。  
だと言うと 子どもたちは それで それを 桑の実を 食べるのに 忙しい。

B クチ マックロニ シテ (笑)。  
口(を) 真っ黒に して。

D クチ ムラサキニシテ。  
口(を) 紫にして。

A オー ムラサキニ。  
うん 紫に。

K ソレワ オナジ クワノキデモ シュルイカ° アッテ アジカ° チカ°ウ。  
それは 同じ 桑の木でも 種類が あって 味が 違う。



B ソノ ソノ シュルイニヨッテ ミーカ° ナルカ°カ°。  
その 種類によって 実が なるのかが。

D ウ ウマイ。  
おいしい。

C マタ イロモ チカ°ウ。 アジモ チカ°ウ。 (B オー アジカ° チコ°ーカ°ヤ) ウン。  
また 色も 違う。 味も 違う。 (B うん 味が 違うんだ) うん。

K アレワ ナンテ ユンデスカ アノ ミ ミノコトワ ナンテ ヨンデマシタ。  
あれは 何と 言うんですか あの 実のことは 何と 呼んでましたか。

C アレオ ツバミチュータト オモッタケドモンネー。  
あれを ツバミと言ったと 思ったけれどもね。

B オー オー ツバミ。 ソー ソー ソー ソー ツバミ ユータンネー。 ンー。  
うん うん ツバミ そう そう そう そう ツバミ(と)言ったね。 うん。

A ツバミツチュンジャ。  
ツバミと言うんだ。

D アカメノカ° ウマカッタンケネ。 (B エー) アカズツパイノ。  
(色が)赤めのがおいしかったのかね。(B えっ) 赤酸っぱいの。

C ソヤ ソー アカメノー アカメノー。  
そうだ そう 赤めのが。赤めのが。

A ソレカ° ソレカ° イマユー。  
それが 今言う。

B オー ソー ソー。  
うん そう そう。

D アノ クロイカ°。  
あの 黒いの。

A クロイカ° ローソヤロ。  
黒いのが ローソだろう。

C ソヤ ソヤ クロイカ° ローソヤ。  
そう そう 黒いのが ローソだ。

D デカイ ツブヤケドー。オー。(C チョット イチコ°ホド ウマカッター) オー ウマカッ  
大きい 粒だけど。 うん。(C ちょっと 苺のように おいしかった) ああ おいしかっ

タンノー。 ホントネマー。  
たねえ。 本当にまあ。

C アカメミタイホァ ヨカッタンヤ。  
赤めのような方が よかったんだ。

D アンナトキノコト オモトー イマノ モノァ テンナ モンジャ。  
あんな時のことを 思うと 今の 者は 大変な ものだ。

B ンー。 ナンモ タベモノァ ネーサケ ソーユモンオ ネット (D オーン) タベテ ナン  
うん。 何も 食べ物が ないから そういうものを ねえ (D うん) 食べて 何し

シタカ°ヤワ°ネー。ウーン。  
たんだよねえ。 うん。

D ワテラカテー。  
私たちも。

C ロ ロクカ°ツン ナルト ヨソノ ウメノキノ シタニ オットルカ°オ ヘロテ アオイカ°  
6月に になると よその 梅の木の 下に 落ちているのを 拾って 青いのを

オ ウチカラ シオ チョッコ ココ (B ソー ソー) テンナカ イレテ モッテ デテ  
家から 塩(を)ちょっと ここ (B そう そう) 手の中(に)入れて 持って 出て

ソレ シオ ツケテ ナマノ ンメ カジツル。(A 笑) (B ソーヤ ソーヤ)  
それ(に)塩(を)つけて生の 梅を かじっている。(A 笑) (B そうだ そうだ)

D キューリカテ ナマデ クーカ°カ° ホントニ ウマカッタ。  
胡瓜だって 生で 食べるのが 本当に おいしかった。

C ソレト サヤマメ。 サヤエンドーチュテ ホラ ネット カワノ サヤノモテラ タベルヤツ  
それと さやえんどう。さやえんどうと言って ほら ね 皮の さやごと 食べるもの

アルワ<sup>ン</sup>ネ。 アンナモンラカッテ ヤッパ ソーヤ。 チヨ チヨット シオ ツケテ (B  
あるよね。 あんなものだって やはり そうだ。 ちょっと 塩(を)つけて (B

ソー ソー) カスナー アマミ アルサケ マ ナンデモ テネカカルモンオ クッタンヤワ  
そう そう) とても 甘味が あるから ま 何でも 手に入るものを 食べたんだよ。

イ。

B ソーヤ。  
そうだ。

A ソーユコトカ<sup>°</sup> ヤッパ ヒトツノ ケンコーノ ヤッパリ (C ウン) (B ソンカ<sup>°</sup>ヤワ)  
そういうことが やはり 一つの 健康の やはり (C うん) (B そうだね)

ヤサイモンデ ナマデ ヤサイオ タベルカラ カラダノ ナイゾーアタリモ アノー (C  
野菜もので 生で 野菜を 食べるから 体の 内臓あたりも あのう (C

ソヤ ソヤ) アノ ヤッパリ テーコーリヨクカ<sup>°</sup> ツクシー (B ソー ソー) カラダニ  
そう そう) あの やはり 抵抗力が つくし (B そう そう) 体にも

モ テーコーリヨクカ<sup>°</sup> ツクシ ソーユコトデ ヤッパリ ソートーノ カラダノ ヤッパリ。  
抵抗力が つくし そういうことで やはり 相当の 体の やはり。

C ソツデ ヤッパ シェンイシェーヒンカ<sup>°</sup>モンオ ヨケ タベタッテユコトヤロ<sup>ン</sup>ノー。  
それで やはり 繊維製品(が)のものを たくさん 食べたということだろうね。

B ソーヤ。 アノ キューリナンカンネー アノー (C シオ ツケテ (笑)) シオ ツケテ  
そうだ。 あの 胡瓜なんかね あのう (C 塩(を)つけて ) 塩(を)つけて

ワ ホイテ アサゴハンニ モツテッテ タベテワ アソンドツタカ<sup>°</sup>。  
は そして 朝ごはんに 持って行って食べては 遊んでいたけれど。

C ソレ ア アーキンナルト ナマサツマイモ。 (B ソーヤ ソーヤ) ネー。ソツレワ マー  
それ 秋になると 生さつま芋。 (B そう そう) ねえ。それは まあ

アッデ デーケ コンナカ<sup>°</sup>オ モツテデテ ソシテ ガブーット ヤッテ。 (A 笑) ヨコニ  
あれで 大きい こんなのを 持って出て そして がぶっと食べて。 (A 笑) 横に

モットランモノァ オツタリシテナ ワレ ソレ ヒトクチ ウラニ ワケテクレヤ ユーテ  
持っていない者が いたりしてね お前 それ ひと口 俺に 分けてくれよと言って

(D ソーヤ) オー アンマリ デケーカ° カクナツチューテ カブ ヒーテコー  
(D そうだ) うん あんまり 大きいのを とるなと言って 株(を)ひいてこよう

(A・C・D 笑)  
(A・C・D 笑)

D ホー ユータモンジャ ワレ デケー クチデ カブツト カムナーツチューテワ クトルカ°  
そう 言ったもんだ お前 大きい 口で がぶっと 噛むなと言っては 食べている

ントコエ マタ テァ コーシテ イットツタワ ワカ°ノ テァ ネット。 ンー。 (C ヨー ヨ  
ところへ また 手が こうして いていたよ 自分の 手が ね。 うん。 (C よく よく

ー アーユコト シテ  
ああいうこと して)

D テンナ モンジャ。  
大変な ものだ。

B ネー コドモノトキァ ソーユコト シテ アソンデ〜 ネー オツタカ°ヤカ°ンネー。 ナニ。  
ねえ 子どもの時は そういうことして 遊んで ねえ いたんだよねえ。 何。

K フユ ユキカ° フルト ナニシテタンデスカ。  
冬 雪が 降ると 何をしていたんですか。

C フユ ユキァ フルト ヤッパリ アノー ナカニヤー アノー トランプ モットル コモ  
冬 雪が 降ると やはり あのう 中には あのう トランプ(を)持っている子も

オツタシノー ソレカラ ヒヤクニンイッシュノ カルタ モットル モンモ オツタシ ソ  
いたしね それから 百人一首の 歌留多(を)持っている者も いたし そ

レカラ イマ ユータ アノ パース アレ モツテ オテラ オテラ イクト フユン ナル  
れから 今 言った あの 面子 あれ(を)持って お寺 お寺(に)行くと 冬に なる

ト ユキカ°コイ シテアル (B ソー ソー) コモデ°ネ ソヤサケー ナカ マーワルト  
と 雪囲い してある (B そう そう) 菰でね だから 中(に) 回ると

ユキモ ネーシ カジェモ ソンネ アタランシ ソスツト ソコデ ンナ アスンドル。  
雪も ないし 風も そんなに当たらないし すると そこで みんな 遊んでいる。

B ヘッタンコ ユーテ〜 (C オー) アノ〜 パーデ ソノ ハシラネ コーシテ (A 笑)  
ヘッタンコと言って (C うん) あのう 面子で その 柱に こうして (A 笑)

ヒラヒラート コッデ ソイデ イチバン ウシロマデ キタカ°カ° (C ヨケ イッタホド  
ひらひらと これで それで 一番 後ろまで 来たのが (C たくさん言ったほど

エーカ°ヤ) オー ソーシット ソー ソー コーシタカ°オ モローテ ソーユー ショーブ  
いいんだ) うん そうすると そう そう こうしたのを 貰って そういう 勝負

ミタイナ°ネー ナンヤケド ソーユコトモ シテ アソンドッタ…。  
みたいだね なんだけれど そういうこともして 遊んでいた…。

C ホシテ オテラノ コーシドノー コーシドノ ソノ イタト コーシ ヤツタル サンノ ア  
そして お寺の 格子戸の 格子戸の その 板と 格子(を)してある 棧の 間

(注10)

ワシャカ° スイトルンヤ (B ン) フルシナツタモン。 ソコ エレテ ソシテ コー チ  
が 空いているんだ (B うん) 古くなったものは。 そこに入れて そして こう

(注11)

ヨード パ パチンコノ タマ オツテクルヨナモンジャ。 ソノ アワシャ スイテ トコエ  
ちようど パチンコの 玉(が)落ちてくるようなものだ。 その 間(の) 空いた 所へ

トーツテ ソシテ ンマイコト ヨケ トンダカ°モ ソレモ ヤツパリ アノー オーカ ト  
通って そして うまこと たくさん 飛んだのもそれも やはり あのう 多くは 飛ば

バンカ° サッキノ トバントオルカ°オ トツタリンノ ソーユーコト シテ マー オツタン  
ないが さっきの 飛ばないでいるのを 取ったりね そういうこと して まあ いたん

ヤ。  
だ。

(注12)

A マ ワタシラー ソトデー アノー チョード シンザカノ サカノ (B ン) アノー カ  
まあ 私など 外で あのう ちようど シン坂の 坂の (B うん) あのう カ

オルサントコノ ウチト ソレカラ アノー アレントコノ アイダノ アノ サカノ アッコ  
オルさんの所の 家と それから あのう あれの所の 間の あの 坂の あそこ

エ (C アー スキーカ) オー スキージャ ソリオ ソリ タケー タケ キッテ (B オ  
へ (C ああ スキーか) うん スキーだ。 櫓を 櫓 竹(を)切って (B う

ー) タケノ ソリデワ ウエカラ ザーット アノー ソコノ アニキヤラ マ ソコノ ア  
ん) 竹の 櫓では 上から ザーッと あのう そのの 兄さんや ま そのの 兄

ニキァ アンマ クエンケドモ アノー ニヨモザノ アンカヤラ ホイデ タ タケザノー  
さんは あまり感心しないけれども あのう ニヨモザの 長男や それで タケザの

(注13)

オッサ (B ンー) (A ンー) アッラー オヤカタデー アッラー ノッテワ スット シ  
弟 (B うん) (A うん) あいつらが親分で あいつら(が)乗っては すうっと下

(注14)

タマデ オリルンヤ (B オン オン) ホイテ ウラーデモ チョーザクンサンデモ ト  
まで 降りるんだ (B うん うん) そして 私でも チョーザクさんでも と

ニカク アノー アッコノ ニジェーデモ カジウラデモ ソノ シタマデ オリタカ°オ ヒ  
にかく あのう あそこの ニジェーでも カジウラでも その 下まで 降りたのを 拾っ

ロテ ウエマデ アケ°ナ ショーカ°ナイ (B ハー) ノシテアタランカ°ジャ マダ。 ホイ  
て 上まで 上げなくては 仕方ない (B ほう) 乗せてもらえないんだよ まだ。 そ

テ コブンヤサケネ フタリラ ホイテ アッラ スート イクト ホイト ウラ ソレオ タ  
して 子分だからね 二人は そして あいつら すうっと 行くと そうすると 私(が)そ

ツタツタツタツット ウエ ソリ カタンデアカ°ッテ ソシテ (B 笑) ソシテ サンカ  
れを さっさと 上に 櫓を 担いで上がって そして (B 笑) そして 3回

イニ イッペンワ ノシテモラエナダノ (笑) (D オメーノ リッパナ ヒトデモ ソユーコ  
に 一度は 乗せてもらえなかったよ (笑) (D あなたの(ような)立派な人でも そういう

ト ササッテアツタカイ (A・D 笑) イマ シタカラ ヒッパッテ シタカラ ヒッパッテ  
こと させられたのかい (A・D 笑) 今 下から 引っ張って 下から 引っ張って

(注15)

アケ°テワ アンカ アンカ モッテキタゾツチュテ ソシテ モッテキテ ソシテ アッラ  
上げたよ 兄ちゃん 兄ちゃん 持ってきたぞと言って そして 持ってきて そして あいつ

スベル。 マタ モッテ ホイト サンカイニ イッペンホド チョッコ ノシテアルン。(B  
らが滑る。また 持って すると 3回に 1回ほど 少し 乗せてもらえる。(B

笑) ソーユー フユ フユ ソーユシコト。

笑) そういう 冬 そういう仕事。

C マー ノシロノ サカ イッテ スベッタワインナ (A オー スベッタ スベッタ アッコ  
まあ ノシロの 坂(に)行って 滑ったよね (A うん 滑った 滑った あそこ

ノ ノシロノ サカモ タンナ サカヤ) オー チョード イマノ カワタニノ イシャノ  
の ノシロの 坂も 大変な 坂だ) うん ちょうど 今の カワタニの 医者の

(A アー ソーヤ) アコヤ (B ン) ナ (D ソヤ ソーヤ) ナ (D ドッカ ソ

(A ああ そうだ) あそこだ (B ン) ね (D そう そう) ね (D どこか そ

ツツァノ アノ…) ノアル (D アコヤ スキージョーノ アッタトコデモ ナツバンヤナ  
ちらの あの…) のある (D あそこは スキー場の あった所でも 夏場ではな

(注16)

カッタケ) シェ シェーザエモサンノ (D ン) ハタケデー チャノキ ウエァ ユキァ フ  
かったか) セーザエモンさんの (D うん) 畑で お茶の木(の)上は 雪が 降

ルト チャノキァ カクレッシモン (B ン ン) ホイト ソノ ウエ コー チョード  
ると お茶の木は 隠れてしまう (Bうん うん) そうすると その上(が)こう ちょうど

エー スローブナットルサケー (B スキージョンナル) スベッタンジャ。 ソレモ ス  
いい スローブになっているから (B スキー場になる) 滑ったんだ。 それも ス

キーイタカッテ ワカ°デ ツクッタサケヤ。 タケ ワッテ (A ソヤ ソヤ タケ ワッテ  
キー板だって 自分で 作ったからだ。 竹(を)割って (A そう そう 竹 割って)

ン ホイテ サンボンホド タケ アワイテ ソノ ウエニ イタ コー ア ネ ソコニ カ  
うん そして 3本ほど 竹(を)合わせて その 上に 板(を)こう ねえ そこに 革

ワバンド サイト ソシテ ナーンカ ナカ°クツ ハイタンジャケ ウチ ユート ワラッテ  
ベルト(を)挿して そして 何か 長靴(を) 履いたんだから 家 言うと 笑って

(笑) ホイテ ナンベンデモ コロンドルサケニ キモンノ スソァ ダーバダバン ナッテ  
そして 何回でも 転んでいるから 着物の 裾は ずぶ濡れに なる

(A・C・D 笑) エー。

(A・C・D 笑) ええ。

A ソッデモ ヤッバリ カゼ ヒカントー。  
それでも やはり 風邪(を)ひかないで。

C ソッデモ ソンナモノァ アクルヒ マッタ ワスレテイッテシマウツテワ オコラレトルン。  
それでも そんなものは 次の日 また 忘れて行ってしまおうと言っては怒られている。

A カゼ カゼ ヒカンカ°ヤツテ。 タバタバナッテ キテモ カジェ ヒカナンダカ°ヤイ。 マ  
風邪(を)ひかないんだって。ずぶ濡れになってきても 風邪(を)ひかなかったんだよ。まあ

ソレモ アルシ ソレカラ アノー アノー ナンチューカ アノー ムカシワネー イマノヨ  
それも あるし それから あのう 何と言うか あのう 昔はね 今のよう

ーニ コーユー アノー モット モット サムカッタ フユ。 ダカラ アノー (C ユー  
に こういう あのう もっと もっと 寒かった 冬。 だから あのう (C 雪が

キァ フッタワイ) ユーキモ フッタシ アノー (D ヤネカラ デハイリシルモンナ オツ  
降ったよ) 雪も 降ったし あのう (D 屋根から 出入りする者が いた)

(注17)

タ) ナ ナカニシサンデモ ミナ シツテオイデルケドモ キバカ°タツチュカ° アルカ°ネ  
中西さんでも みんな 知っていらっしゃるけれども木場潟というの あるよね

(注18)

(B ン ソー ソー) アッコ ソラアルキ デキタンヤ。 ソラアルキツチュト (B ソ  
(B うん そう そう) あそこ(を)雪渡り(が)できたんだ。 雪渡りと言うと (B そう

ーヤ) コーツテ ソノ ウエ ソットットット アルケタンヤ。 ソーユー ジシエツカ° シ  
だ) 凍って その 上 とととととと 歩けたんだ。 そういう 時期が い

ヨツチューデァ ネーケド タマタマ。  
つもいつもでは ないけれど たまたま。

C アリヤー アリヤー アリヤ タイショージュエゴネン ショーワグンネンノ。 トシヤンノ  
あれは 大正15年 昭和元年の 年だね

(A ホンナ ジブンヤツタカ)

(A そんな 頃だったか)

B アー ソノ トシヤ。  
ああ その 年だ。



C タンナ オーユキヤッタワ アンデー。

大変な 大雪だったよ あれで。

B オー オーユキ テンナホド コーツテ～ ホイテ カタカ°ワカ° コーツテ アルケタカ°ヤ  
うん 大雪 大変なほど 凍って そして 片側が 凍って 歩けたんだよ

ワ キバワ。 アノー (C キバワタレタンヤ) カイブンノ キヨシツテ オツテヤッタノ  
木場潟は。 あのう (C 木場潟渡れたんだ) カイブンの キヨシって いたよね

(C ウン ウン ウン) (A オ オー オー) アノ シェカ° ヒクイ アノコァ アノー  
(C うん うん うん) (A うん うん) あの 背が 低い あの子は あのう

ムコーマデ ワタツタンヤ。 (A アー ソーカ) ホジャケドカ アノ チューイ シェ シ  
向こうまで 渡ったんだ。 (A ああ そうか) だけど あの 注意 先

エンシェー チューイサシエタ アトカラ アンナトコ ワタルコトァ ナラン モシヤ (C  
生(が) 注意させた 後から あんな所(を)渡ることは ならない もし (C

ワレタラ モー アカ°レンサケンネー アレダケワ オソロシー) アンナトコ ジェツタイ  
割れたら もう 上がられないからねえ あれだけは 恐ろしい あんな所(で) 絶対

シルコトァナランゾ ユーテ チューイサレタ。

してはいけないぞと 言って 注意された。

D モトノ アナエ アカ°ツテコレンシーノー。

元の 穴へ 上がってこれないしねえ。

C シー ソシテ～ (B ソソネ コーツテ アブネー) テー カケテ アカ°ローシルト マタ  
うん そして (B そんなに 凍って 危ない) 手を かけて 上がろうとすると また

ワレテクルンヤ。

割れてくるんだ。

B ソー ソー ソー ソー カタイツポカラー。

そう そう そう そう 片方から。

C ゴボーツ ゴボーツ イクンヤ。

ごぼっ ごぼっと いくんだ。

B シン。

うん うん。

- (注1) ウツクシ…当該方言では、共通語の「美しい」と「綺麗」にあたる形容語の意味をウツクシ(一)で表現している。
- (注2) オトイタ…五段動詞オトス(落とす)のタに続く場合のサ行イ音便形。
- (注3) モツテカッシャル…モツテク(持って行く)の未然形+尊敬の敬語助動詞ツシャルが付いた形。
- (注4) オイタル…オイタルの～タルは～テアル(である)の縮約形で当該方言では普通～タルの形で使用される。
- (注5) パー…符津町ではかつて男の子の遊びとしてよく行われた面子遊びの「面子」のことを、このようにパーあるいはパースと言っていたらしい。
- (注6) カタンナン…～ンナンは「～しなければならない」の意の表現で、動詞の未然形に接続して多用される。話題1(注20)も同様の例。
- (注7) サイテワ…サス(挿す)が助詞テに接続して起こるサ行イ音便形。
- (注8) モンデ…モク°(もぐ)が助詞テに接続する場合、普通モイデとなるが、ここでは撥音便の形で実現している。
- (注9) クゥー…クゥは合拗音の例ではなく、クワ(桑)の発音がたまたまこのような形で実現したものの。
- (注10) フルシナッタ…フルシ(一)は、対義語アタラシー(新しい)への形態的類推から、フルイ(古い)がフルシーに変化した形。
- (注11) オツテクル…一段動詞オチル(落ちる)が助詞テに接続する場合、オチテと非音便形にならず促音便化した例。北陸方言では一般的な現象である。
- (注12) シンザカ…符津町内にある坂の名前であろう。
- (注13) アツラ…アイツラ(あいつ達)からの変化形。
- (注14) チョーザクンサン…チョーザクは話題の人の家の屋号かと思われる。同ページに見られる、ニヨモザ、タケザ、ニジェー、カジウラなども同様に屋号か。
- (注15) アンカ…当該方言で男兄弟の特に長男をさす呼称。
- (注16) シューザエモン…話題の人の家の屋号であろう。
- (注17) キバカ<sup>タ</sup>…符津町の東部にある湖の名前。「木場潟」と書く。
- (注18) ソラアルキ…冬に雪が積もったあと、天気の良い朝、放射冷却のため雪の表面が凍って固くなるので、普段は足がはまってあるけなような雪の上を歩いたり、走ったりして遊ぶ遊びの名前。小松市内でも様々な方言形が聞かれる。ソラアルキのソラは雪の上を歩くことから、「上」の意味と思われる。

(以上、文字化部分計約32分30秒)

## 【関連文献】

- 加藤和夫（1992）「石川県辰口町方言の動態一十年間の変化と世代差一」、『金沢大学 語学・文学研究』第21号，金沢大学教育学部国語国文学会
- 加藤和夫（1995）「石川県能美郡川北町の生活 言葉」、『川北町史 第一巻 自然・生活編』，川北町役場
- 加藤和夫（1997）「石川県小松市大杉谷川流域の方言」、『小松市立博物館研究紀要』第33号，小松市立博物館
- 加藤和夫（1998）「石川県小松市郷谷川・滓上川流域の方言」、『小松市立博物館研究紀要』第34号，小松市立博物館
- 加藤和夫（1998～）「みまっし きくまっし 小松の方言」、『広報こまつ』（1998年4月号より毎月連載中），小松市役所広報課
- 加藤和夫（1999）「石川県小松市符津町方言の生活語彙」、『小松市立博物館研究紀要』第35号，小松市立博物館
- 川本栄一郎（1983）「加賀市の方言」、『加賀市史 通史 上巻』，加賀市役所
- 佐藤 茂（1983）「辰口町のことば」、『辰口町史 第一巻 自然・民俗・言語編』，辰口町役場（稿中掲載の言語地図作成、および「辰口町方言の動詞活用表と解説」を筆者加藤が担当）

【付記】初校段階で、不明箇所の確認にあたって小松市立博物館方言調査委員会委員（小松市立博物館専門員）犬丸博雄氏および話者の方々のご協力を得た。記して感謝申し上げます。